ヨーロッパ歳時と民間習俗

植田重雄

序

歴史的出来事がつねに一回性のこととしてその特質を現わすのにたいし、民間習俗は歴史を生む基礎として民衆の生活規定、気質や情念などを維持存続させているものである。たとえ戦乱の中でもクリスマスや復活祭、五月柱の歌や踊りの催しを止めようとしないのが民衆の心情である。多くの軍団や輸送部隊が通り過ぎてしまえば、農民は元通りに畑を耕して種子を蒔き、家畜を牧草地に放牧し、葡萄を摘み取ってワインを作り、収穫感謝祭を営む。民間習俗は統治者が命じたことでも、教会が決めたことでもなく、庶民の心の中でこのようでありたい、あるべきだという願望や想像が行為と慣行となって聖なるものや大自然と人間との関係に調和を生み出してきた。むろん歴史的出来事で重要な意味をもつものが、記念として行事の中にはいってきて、それが祭となることもある。歴史と習俗は密接にむすびついて古代中世から近世へと必要なものを伝えてきた意味は大きい。人間が太古から直面したものは、大自然がもたらすさまざまの災害と脅威であった。火山の爆発、氷河、氷雪害、洪水、大風、山火事、雷、

地震、津波、土砂崩壊、野獣に襲われること、蝗の害、蟲の害、倒木、落石、さまざまの伝染病、風土病、犯罪、その他の不安に脅やかされており、家畜が狼や熊に襲われることもあり、農耕生活にしても生産技術や病虫害の予防法、品種の改良は緩慢で生産能力は低く、不安定であった。その上異民族との圧迫のために民族異動や戦闘などもあり、人口は減少してゆく場合が多かった。とくに冬の寒さを防ぐ方法設備は未熟であった。ヨーロッパの諸民族が現在の場所に定着し、やや安定を得て文化を形成しはじめるのは、中世紀にはいってからである。謎のケルト族はゲルマンの侵入とともに大陸からは姿を消し、ローマとローマ文化が進出して、民族的にも混血し、さらにキリスト教がはいってきて、ヨーロッパは次第に自己固有の生活形態を作り出していった。

以上述べた大自然と人間の基礎的関係やさまざまの出来事は祭や行事として習俗化されていった。文化形成の最も素朴なあり方は民間習俗を存続することにある。その中にゲルマンの神話と習俗、ローマによるギリシヤとラテン文化の伝統あり、キリスト教が文化に全体的な統一を与えて形成した宗教的な習俗があり、それらは重層的に複雑な様相をなしていてけっして単一なものではない。これらの一つ一つを要素に分析することは、当面ここでの目的とするものではない。たとえばキリスト教は古代ゲルマンの宗教（自然宗教）を荒々しい自然の暴威と規定したり、魔的なものとすることによってキリスト教の精神性の優位を示した。またゲルマンの習俗にキリスト教的意味を附与して、新しい粧いを示したものもある。中世期以降に発見された泉はむろんのことであるが、すでにゲルマン古代に知られていた泉に「マリアの泉」と名を換えるだけで新しい意味をもつこともある。ところが全然キリスト教的な意味付けなしに古代からそのままの様相をもつ祭の習俗もある。たとえば謝肉祭（ファスナット）などの仮面をかむり狂い騒ぎ歌う祭は、春の胎動への自然な発露とも見るべきものであり、教会は多少道徳的に批判は加えてもこれを黙認している。また五月祭の五月柱も同じで春（夏）を迎えたことを喜び踊る行事であり、これも特

別にキリスト教的といった刻印をもっていない。それゆえ先住文化にたいしキリスト教が優位に立ってつねに圧迫したと見るのは誤りである。グリム兄弟が採集したドイツの民話や民間信仰の中には水の精（Wassergeister）、ニュンフェ、森の精、カスマンドル（Kasmandle）、コーボルト（Kobold）、エルフェ（Elfe）、ノルネ（Norne）、森の小人（Männlein）等々は民衆の心の中に伝えられてきたものであり、近世以降の童話や幻想芸術、ロマン派文学の中に生きているのである。

キリスト教自体もヨーロッパにはいってくることにより、おのずから変化し、新しい内容を持つに至った。その特徴の一つをあげると、聖母崇拝である。聖母崇拝は原始キリスト教にかすかな萌芽が見られるといってもよいが、あれほどまでに熱烈な運動となってヨーロッパに拡大し、深化されるに至るとは、想像もできぬ。教父は幾度も聖母崇拝を禁じた。しかし到底制止できなかった。結局それならば積極的に認めることによって宗教心を浄化する方を良しとして奨励するようになる。これはゲルマンの大地母神崇拝の要素がマリア崇拝の中に転換されたとも見ることができる。キリスト自体は神と人間の仲保者（Vermitteler）としての役割があった。ところがヨーロッパにはいっていったとき、キリストは世界の審判者として、民衆にとって世の人間の歴史や行為を審くおそろしい存在者となっていた。キリストの直接の弟子である十二使徒も各部署を担当する軍司令官に変った。キリストは復活してのち昇天するが、再びこの世界に再臨して最後の審判を行うと信ぜられていた。中世を溯れば溯るほど畏るべき審判者としてのキリストのイメージが強かったのである。マリアは弱くして罪深い人間の嘆きをききいれる恵み深い母性的な聖者として、神やキリストにたいする代願者となっている。聖母崇拝、マリア信仰が熱烈に拡まったのは、宗教的権威の超絶性の強さにたいする一般民衆の愛の希求の現われともいえよう。

聖母崇拝を突破口として十二使徒以降の聖者は、守護聖者となってヨーロッパ的な展開をとげる。徳行高き聖者

が崇められるのは当然であるが、東方ビザンツの聖者ニコラオス、伝説的な聖女バルバラなども民間信仰では熱烈な形態をとり、広く崇拝されるに至った。聖マルチン崇拝がフランスよりもドイツで盛んであったりするのは民間信仰の伝搬の強さを物語るものであり、各地各国に独特な聖者が出現し、職業や仕事によってさまざまの守護聖者が出現し多様化していった。山岳、森林、泉、川、海、航海、狩猟、家畜、農耕、豊饒、病気、出産その他職能によっては、二重、三重に重なり合っているほどである。民間信仰においては神やキリスト、マリアよりもさらに親しみやすい存在として聖者は崇拝された。聖者はキリストの分身のごとく、直接身近にあって人間の切実な願いを満たし、事細かに気遣ってくれる存在として尊重された。このヨーロッパにおける聖者崇拝は古代信仰から脱してキリスト教信仰にはいっていったとき、ゲルマンの多神教的性格にたいするキリスト教の対応であったといえよう。この点からいえば、ヨーロッパキリスト教は一神教（唯一神教）ではなく、聖者崇拝とともに多神教的性格となっている。もし彼等が一神教を強調しているとすれば、それは原型に還ろうとする反対の志向を示したものに過ぎない。キリスト教の指導者たちは守護聖者を高い精神性へと高め、その宗教的意味を貫徹しようとして苦心してきた。それにもかかわらず民衆は祭のときは、守護聖者の彫像を教会やカペルレから広場の祭壇に迎えてミサを行い、台座に載せて担いで町や村を練り歩いているのである。ヘブライズムといっても、キリスト教とユダヤ教はちがっていた。神が人間に化現し、言葉（ロゴス）が肉体となるということは、キリスト教の秘儀であり、出発点であった。したがってこの化現の秘儀に添う思考の世界だけでなく、具体的現実の民間習俗の中に宗教意識が展開してゆくのである。なぜ民間習俗の中にその民族の文化の特質となる原型や酵母がみられるかということについてここで一端を一瞥してみたのである。民俗学研究はまことに多岐多様にわたっている。なお仔細に一つ一つの事例について調べ、明らかにしてゆく必要がある。なお本文中に引用した原詩・原文はすべて末尾の註にあるので、綿密を

期する場合は併せて読まれることを希望する。

四　月

四月は一般的にはラテン語のアプリリス（Aprilis）に由来するアプリール（April）と呼んでいる。オヴィディウスによればこの言葉は「開く」（aperire）、という意味にもとづいており、閉ざされた冬から春はすべてを開く意味であるという。ところがこのラテン語以外に別な呼び方が沢山ある。例をあげると、四月を「復活祭の月」（Ostarmânôth Ostermonat）と呼ぶようにカール大帝は定めた。「ガウク（Gauk）の月」という。ガウクは「カッコウ」（Kuckuck）のことで春を告げるカッコウの月の意味である。デンマークやユトラント半島では、「羊の月」（Faare maand, Schaf-monat）といい、あるいは「羊飼の月」（Hirtenmonat）ともいう。牧草地に牛羊を放牧する季節の意味であろう。「牛の月」（Stiermonat）ともいう。これは四月には太陽が牛座にはいるからである。民間暦などの木版刷りには牛座を画いていることが多い。

三月にはいるとライン、ドナウ河の本流、支流では雪解けがはじまって増水し、牧草地や畑に氾濫する。河岸には高い堤防がなく、ポプラや楡の並木が水に浸り、村の家々が舟で往復する風景は珍しくない。三月二十二日春分（春の始まり）の頃には、太陽も明るく輝きを増し、雨も降り、温かくなって草が一斉に萌え出す。天候はこの頃から四月にかけて変化が多くなる。

「四月は何をしたいのか、自分自身でも分らない」、「四月は一日のうちに雨と雪と太陽の光をもたらす」[1]という諺があるように温くなるように見えて、急に寒さが戻ったり、よい天気と思っていると、雲があらわれて雨を降らす。日本の秋の諺と反対に「四月と女性の心はいろいろに、また急に変りやすい」[2]という。だが「温かい四

月の雨は大いなる祝福」であり、「四月に月が冴えると、葡萄も果物も実らない」という。「四月にやぶすもも(Schlehdorn)が早く咲くと、農家は早く刈り入れる」[3]という。「四月が冴えていると、五月には一層天気は荒れる」[4]ともいう。「四月と五月が一年のおかゆを作る」、「復活祭に雨が降り込めば、ワインは水ぼくなる。」、「四月が冷たく湿っぽければ、牧草がよく育つ」。「聖ゲオルグの日(二十三日)に鴉が麦の中にかくれる位ならば、豊作の年になる」、「聖マルコの祭(二十五日)には麦に肥料を入れよ」、「聖ヴィタールの日(二十八日)に霜が降りれば、まだ十五回位霜が来る」など天候にたいしては他の季節よりはるかに鋭敏な諺が多い。農耕開始の時期であるので当然農事占いが多い。

四月の冗談

「四月の冗談」(April Scherz)とか、「四月馬鹿」(April-Fool)は十七世紀前半頃から俄かにいわれ出したらしいが、このような慣わしは広くインドゲルマン系の文化にあったもので、起源を溯ればかなり古いと推定されている。その由来についてはさまざまある。まづ第一は四月の天候気象が冬から春へと移ってゆくので、ひじょうに変りやすく、人間は騙されたような気にさせられる。真面目であるかと思うと俄かに巫山戯たり、からかわれているようである。この自然の気まぐれに人間も笑いで対応し、愚者となる。第二には春を迎える「馬鹿祭」(Quirinalia)が古代ローマにあり、これに基づく慣わしである。人々は仮面をかむり、滑稽な風態や仕草、踊りをして大騒ぎをして春を迎える祭を行った。こうした祭の遺習に基づくものともいわれている。ただしキリスト教化されたヨーロッパでは、とくに四月一日だけ馬鹿になって騒いだり、からかったり、冗談をいい合って宜しいということになったらしい。もっともこのような慣わしは「謝肉祭」(Fastnachts)の馬鹿騒ぎを見れば、これはローマの祭

にかぎらず、ゲルマンの習俗として古くから存続しているものであって、また前回で述べたような冬送り、夏迎えの祭と相通ずる要素である。春の始まりとともに感ずるとらわれない喜び、無力となった冬をからかって、夏が思いのままに力を発揮できるように加勢するためであるともいわれる。

ローマでは四月一日美の女神ヴィーナスの祭が行われるが、そのとき「四月」(Aprilis) を連れてやってくるともいう。ギリシァ神話には何でも口に入れて飲みこんでしまうクロノスから、新しいオリンポスの秩序をつくるために主神ゼウスをいかに守るかを考え、キュベレは石を山羊の皮に入れてクロノス神を騙し、ついに世界を統治する。他方中世では四月一日はイスカリオテのユダの誕生日であり、あらゆる非難罵倒にユダは耐えなければならぬ。このことが転用されて、からかったり、巫山戯たりして良いというような誤った習俗が生れたという説もある。もっとも別の解釈ではイエスをローマやユダヤの祭司に売り渡したため、ユダが首を縊った日ともいう。いずれにしても春を迎える月の最初の日が嫌悪すべき日となっている。南スラブ地方ではこの日に生れた子供は盗賊・嘘付きになるといってきらい、この日の結婚式も避けるといわれる。

四月一日は元来「もの忌み」の日であった。春を迎えるにあたり、その日を慎み家にこもる。日没後にミルクを戸外に出すと、魔に魅入られるとか、牛が死ぬといわれ、子供や女性は森にはいってはならぬ、仕事をしてはならぬという禁忌(タブー)がある。穀物の種子を蒔いてはならぬ、森にはいって木をきると怪我をする。元来この日は春を迎える最初の日で八月一日、九月一日と同じように「もの日」である。もの忌みとして、四月二十四日の聖ゲオルク祭まで冬の水の毒が残っているから、なま水を飲むなとか、野獣、野鳥、魚をとって食べるなとかいう。その他この日には薬味、鰊、塩漬けの魚のたぐい、ピックルスを食べるべからずという習俗を守っているところもある。月のはじめのもの忌みがやがて不吉な日、おそろしい日、悪い日と転じていったらしい。もの忌みや慎みが生れたのは、

畑作物や家畜の虫害、病害、春となって発生するさまざまの病気（伝染病）を防ぐためである。春に目覚める大自然の諸力は生長をもたらすよい点もある代りに、悪い力をふるう悪しきデーモンが出現する季節でもある。それを軽くかわすために、馬鹿になり、冗談をいって追い払うという考え方や風習があった。四月の愚者とか、四月の冗談は以上のような複雑な変化を背景にして展開していった、英国では「皆馬鹿になる日」（All fool day）といい、フラマン地方では「荷送り日」（Versendungstag）という。冗談など書いた手紙を親しい人々に宛てて出す日ということになった。「もしあなたがこの手紙を開けなかったら、あなたも笑いに預れないだろう」といった言葉を添える。その内容も相手が笑い出すようなことが前提であり、「今日は四月の最初の日、だれもが欲しがる冗談をお届けします」と前置きし、相手にできそうもない無理な註文をする。たとえば蟹の血液とか蚊のすねを集めて下さいとか、赤くてしかも緑のインクを送って下さい、丸い三角のパンを作って下さいといった類いである。[5] 子供たちの書いて送るものに比べれば、大人達のものはもっと複雑になるかもしれないが、要するに破顔一笑するようなユーモアがなければ意味がない。

「復活祭の笑い」（risus pascalis）は、復活祭の朝、教会の説教は人々を笑わせるようなものでなければならなかった。キリストの受難を悼み、断食したり、精進潔斎してきた人々にとって、ユーモアやウィットを混えた説教が元気を取り戻させる唯一の道であると中世以来考えられた。だからこの日は坊さんは人々を冗談やユーモアで少少はめをはずしても笑わせてよいことになっている。もっとも復活祭のときだけでなく、普段でも天性面白いことをいって人々を笑わせる坊さんがいてわざわざ遠くからその説教を聴きに来た。またそういう坊さんはあちこちから説教を依頼されて人気があった。こういう説教集も残っている。ギリシヤ、ローマに由来する滑稽な話、コメディもあるが、キリスト教にもユーモア文学、ジョーク、ウィットなどの源となるものが存在する。日本でも「笑う

門には福来る」といい、笑い声の絶え間のない明るい家を喜ぶ。ギリシヤでも「笑いは幸福の源である。ホメロスも神々を笑いで喜ばせた」ともいう。楽しくなる四月をユーモアや笑いで迎えることは春にふさわしいし、キリスト教でも笑いは一つの救いと見做されている。

ヨーロッパ四季図

ラーフェンスブルク市の郷土博物館に「四季図」(4 Jahreslauf) が保存されている。一八五九年、制作に成るもので、ここのホテル (Gasthof zum Lam) のために造られたものである。上下四段の行列の行進図で四季を表わしている。

まず最初に春がやって来る。先頭にはコガネムシ (Maifeäfer) とコウノトリ (Storch) である。正確にはコフキコガネ (Melolontha vulgaris) で擬人化して「修道院の兄弟」(Klosterbrüder) ともいう。黒衣の修道僧に見立てた呼び名である。コガネムシは春の使者とも呼ばれ、早春になるとわざわざ森に探しにゆき、子供たちが見付けてくると、「春がやって来た」といって村中で歌ったり踊ったりして祝う慣わしがあった。コウノトリも渡り鳥の中でいち早く飛来し、教会の塔や家の煙突などに巣をかける。カッコウ、ツバメとならぶ春告鳥である。現在は昔ほどではないというが、ギリシヤ、南フランス、アルザス地方には沢山やって来て巣をつくる。これらの地方は戦火に遭わず、家の破壊が少なかったからではないかとも思われる。

エジプトではコフキコガネではなく、ウマオシコガネを神聖な虫として崇拝した。古代エジプトのガラス製（トンボ玉）碧色の虫の護符のスカラベ (Skarabe) は「神聖カブト虫」と呼ばれる。エジプトの習俗がヨーロッパまで伝わったものか、春に寄せる民族共通の関心事か俄かに断定しがたいが、エジプトではタマオシコガネが丸める

動作を見て天地創造を連想したといい、コガネムシ、カブトムシはいずれも復活神話の担い手である。ヨーロッパではその他テントウムシ、蝶なども春の告知者として喜ばれた。

春の行列は順序としてこのコフキコガネやコウノトリのあとにメルツエン（Märzen）とか鈴蘭とか呼ばれる八人の少女たちが白い衣裳で手に春の象徴である花束を持って歩いてくる。そのうしろに二羽の白鳥に車を索かせて春の花の女神フローラ（Flora）が坐っており、いよいよ主役のおでましである。このフローラのうしろには庭園や牧草地を綺麗に手入れする下女、下男、園丁たちが楽しげに熊手、箒、鎌などを持って歩いてくる。

つぎの二段目は夏の行列の行進がつづいてやってくる。麦刈りをする男女十二人の若者がそれぞれ手に鎌、肩にカラサオをかついで水甕を持つリーダーに率いられてやってくる。そのあとに少年少女に守られて車の上の玉座に腰掛けて穀物の女神セレス（Seles）がやって来る。ローマのこの女神はギリシヤのデメーテルにあたる。夏は楽しい収穫の季節である。ところがこの行列の最後にアルプスにやって来て山登りをしたり、湯治したりする英国の避暑家族の一行を画いている。山のガイド、荷運びのポーターを引き連れた紳士と、驢馬に乗って小さな日傘を差してすましている夫人の姿も画いている。わざわざこのようなものを画いたのは、当時としては珍らしい風俗であり、少々羨むべき生活だったからである。夏になると英国人やフランス人などがなぜスイスへやって来るかスイスの人々は分らなかった。しかし自分達の住んでいる山や渓谷が他のヨーロッパの坦々とした平野とどんなに異っている風景であるかが次第に分ってきて、ようやく観光や登山の事業に力を入れ出した。自分で自発的に気付いたのではなく、他の国々から教えられたのである。夏のレジャーやバカンスのはしりはスイスであった。

第三段の秋の行進は、堂々と隊伍を整え、銃を肩にして先頭を進むのは射撃グループである。秋は狩猟や収穫を楽しむ季節である。華やかな衣裳の婦人が銃を肩にしているのは、狩猟を自ら楽しもうとする宮廷の貴婦人たちで

あろう。そのあとにお供が獲物のうさぎなどを五、六匹かついでゆく。酒樽の上に乗り、大きな杯を手にしているのはバッカスの神であり、そのあとに歩いてゆくのはワイン倉庫の番人や葡萄園主（Winzer）夫妻と葡萄運びの若者たちである。

いよいよ最後は冬の行列の行進である。先頭に冷い北風、霜や雪をまき散らす白髪の老人は冬の擬人化である。つぎに夜廻りの男がやって来る。冬は火事とか盗難が多く、年末、年始のこともあり、夜警は一つの風俗であった。はた織り、糸紡ぎは女性の冬の大切な仕事である。家長や主婦のあとに糸巻き棒を持つ若い娘たちがつづいている。そのあとに司教冠をかむった聖ニコラウス（サンタ・クロース）が長い外衣をまとい杖をついて歩いてくる。「悪い子供は皆連れてゆくぞ」という。昔はいたずらをする子供にとってニコラウスはこわい聖者であった。この聖者のあとに、少年、少女たちが美しく飾り立てたクリスマスツリーを大事そうにかついでやって来る。そして行列の一番最後に馬に車を索かせて、白髯を生やした時間の神サチュルノスが飛んだり跳ねたりしている道化者を引き連れてやって来る。これが一年の四季の行列である。この四季図が画かれた一八五九年には、日本では日米修好通商条約が締結され、インドは英国の統治下にはいり、中国は英仏連合軍によって北京が占領され、北京条約を結んでおり、ヨーロッパ列強のアジア植民地化は最後の段階に到達していたのである。

日本の四季図といえば、春は梅か桜が咲くもとで花見をするか、農家と円錐型の山々が霞んでいる風景を画く。農事四季図であれば、籾（もみ）おろしをする図を画く。夏ならば早苗を植える風景か草取りの図、それにほととぎすか白鷺が飛んでいる。秋は月見の宴か、稲を刈り入れる風景、あるいは紅葉を賞でて酒を酌みかわす。冬は雪景色、団欒する囲炉裡の情景を画く。これに比べヨーロッパの四季図は擬人化された自然と人間の行事の行列行進である。いかにヨーロッパの文化の思考が沢山の擬人的（Anthropomorphism）表現を用いているかということがこれでも

分る。またこの四季図には冬の聖ニコラウスとクリスマスツリーを除けば、すべてラテン（ローマ）文化的表象が主流を占め、四季の愉楽を示している。それゆえ教会暦はこれとは別に厳然と存在している。ヨーロッパ人の意識の中にはキリスト教（ヘブライ的）要素とギリシヤ（ラテン的）要素とが存在し二重構造をとっていることに注目しなければならない。

棕梠（しゅろ）の日曜日

復活祭はクリスマスとならんでキリスト教文化圏における最大の祭である。キリストの復活を祝う前にキリスト受難の「悲しみの聖週」(Karlvoche, Still Woche) にはさまざまの祭や行事が催される。四月十一日頃に行われる「棕梠の日曜日」(Palmsonntag) がその始まりである。この一週間前頃になると村の森にミヤマカタバミ (Sauerklee) ミヤマイチリンソウ (Buschwindröschen) などが咲き、谷の湿地には野性の黄花のプリムラ（桜草）が咲く。枯れた茂みから小犬ほどもある野兎が飛び出し、どこもかしこも春動く気配である。渓川沿いにのぼってゆくと、農夫が手頃な樅や榛（ハシバミ）を切っている。挨拶すると、パルムゾンタークの飾り木を作るために来たという。祭の用意のために森や山にはいって材料を探し、自分で作るところがまだ素朴な農村の生活の面影をのこしている。シュヴァーベンのヴァルトキルヘ (Waldkirch) という町にはこの祭の古い形を今ものこしている。友人の案内で朝七時に町に赴いた。日曜の朝早くどの家も眠っていてどんな風にして始まるのかと案じていると、とりどりの趣向を凝らした飾り木をかついで幾組もの家族がやって来た。八時前には広場は近郷近在の人々で一杯になった。

教会のコーラス隊が「ホサナ・ダビデの子」などの讃美歌を歌い、少年少女のコーラスや町のブラスバンドを先頭に行列が町の大通りを行進してゆく。飾り木をかつぐ人々がいく組も練り歩き、仲々の壮観である。棕梠の若枝

を振ってエルサレムへ入城するキリストを「ホサナ・ダビデの子」といって迎えたという聖書にもとづいて祝う。ヨーロッパには棕梠がないので、樅や榛などの木をとりどりの布や紙で飾り、輪形や若枝や花をとりつける。その作り方、飾りつけは千差万別である。その中心の柱は樅や松であり、皮をはいで色を塗り、紅白の布を巻き、金銀の紙や金具をつけ、リボンを垂らす。樅の緑の枝で輪形にしたり、柳、榛、白樺、赤い実の柊、ソヨゴなどを飾りのようにあしらう。あるいは木形の卵、林檎、パンなどを紐に通したり、リボンを垂らす。尖端に十字架や「アベ・マリア」の文字を入れたり、前年の枯葉のついている枝も挿し入れるのが正式といわれる。ウェストファーレン地方ではこれに鈴をつけてつぎのように歌う。

棕梠よ　棕梠よ
カッコウ鳴けよ
小鳥も鳴けよ
棕梠も芽吹けよ！(6)

この祭は聖書にしたがえば、イエスがいよいよエルサレムへ入城し、ローマの官憲、ユダヤの祭司たちと対決して最後に勝利を成し遂げるのを祝う行事である。群衆は歓呼して驢馬に乗るイエスと使徒一行を迎える。オリーブの枝を振り、「ホサナ、ホサナ、ダビデの子」と呼んだ。一行の歩む道に上衣をひろげ、棕梠の葉を撒いて迎えた。とくに子供たちがイエスの姿を見て走って出迎えたというので、若枝の祝いの行進は子供たちが中心になる。しかし棕梠とかオリーブなどのような植物は地中海沿岸にはあるが、ヨーロッパ中部以北にはないので、これに代る木

を飾り木とし、羊歯の葉のようなものを用いる。地域毎にそこに生えているもので祝う。このようにキリスト入城を祝いながらも同時に農耕牧畜の豊饒を願う春の祭の意味も加わり、独特な形に発展してゆく。

棕梠の飾り木は小さな子供が片手で持てるほどの可愛いものもあるが、少年、少女が持つものは二メートル、三メートルある。五、六メートル以上の大きな飾り木は少年、少女以外の若者や親たちが手伝ってかついでゆく。教会の中は沢山のパルムで会堂が一杯になる。ここでおごそかなミサが行われ、パルムは潔められ、神の祝福を受ける。人間の新しい若枝である子供たちも祝福を受け、大人たちに扶けられながら、意気揚々と各自の家に持ち帰り、家の玄関や部屋、高いところに飾ったり、くくりつけたりする。多いパルムの家は畑や畜舎、果樹園などにも立てて、雷雹、病害、虫害を防ぎ守り、豊饒の年であることを願うのである。

棕梠の日曜日のあとにつづいて「洗足の木曜日」がやって来る。最後の晩餐のとき、使徒たちの足を洗ったのを記念して、キリストの受難を嘆き、懺悔、告白をする。しかし他方この日を「緑の聖木曜日」(Gründonnerstag)と呼び、新しく出た野草や野菜を摘んでスープを作って食べる古くからの習慣もある。ニラ、サラダ菜、ホウレンソウ、オランダセリ、スイバ、タンポポ、イラクサ、カタバミ、キクニガナ、アサツキ等々その数は七種とも九種ともいわれている。日本の七草粥とも相通ずる習俗であり、野草を摘んで新鮮なビタミンを摂取する。またこの木曜日には洗濯、パン焼きなどの仕事はせず、歌舞、射撃、狩猟なども慎んで行わない。ただしキャベツ、野菜、花などの種子を蒔いたり、土を耕すことは祝福されることと見做している。昔はわざわざ緑の外衣をまとってミサに参列したともいう。厳しいところでは、夕方のスープのあとに、断食したり、あるいは精進の食事をとる。教会も十字架を除いて祭壇やその他すべての彫像絵画に黒い布をおおい、キリストの受難を偲んで鐘も鳴らさず、礼拝も簡単に終える。鐘の代りにラッツェン(手廻し鳴る子)をカタカタと鳴らす。これは民間にも普及し、ひっそり

しずまった街や通りを子供たちが鳴らしてゆく。これをランペルメッテとかフィンステルメッテといい、復活祭の前日土曜日の夕方迄鳴らす。木板や、ドラム鑵を叩いたりする。キリストが死んですべての調和が失せ、騒がしい地獄の音がきこえるのだといわれている。しかしこの騒がしい音は古いゲルマンの雷神トール（ドナール）の声を象ったもので、春雷のひびきに由来する春迎えの行事であった。

復活祭の前日

曲流するマイン河が雄大な景観を示すのはフォルカッハ、ゾンメラッハのあたりである。フォルカッハの葡萄園の御堂にはリーメンシュナイダーのローゼンクランツのマリアがある。ゾンメラッハは村にすぎないがここでは早くから葡萄栽培が行われてきており、村に城門と城壁があり自衛できるようになっている村である。復活祭の前日はいわば喪に服しているので通りを歩む人影も少なく、窓を閉ざしてひっそりしている。まだ余寒が残っているが葡萄の芽はふくらんでいる。時折少年たちがラッツエンをかたかた鳴らしては家並を歩いてゆく。それぞれ鳴らし終えると、何やら大声で唱える。呼びとめてその歌詞を聞いて書きとめた。これはその夕方からの一部である。

キリスト者の皆様に祈らねばならない天使の挨拶を
僕たちはこのラッツエンで鳴らします
僕たちは十二回ラッツエンを鳴らします
皆さんに申し上げます

さあ今五時を打ちました

六時に僕たちまはアヴェマリアを鳴らし、神とマリアを讃えます

八時です、皆さんが祈らねばならぬ時であると、天使の告知を鳴らします

アヴェマリア、神を讃えよ、マリア、マリア

ミサの前の一時間です、僕たちは第一回を鳴らします

ミサの前三十分、僕たちは二度目のラッツエンを鳴らします

ミサの前十五分です僕たちは三度目を鳴らします

さあミサが始まります

僕たちも一しょにラッツエルンを鳴らします(7)

復　活　祭

復活祭（Ostern-Fest, Easter）はクリスマスやヨハネス祭とちがって移動祝日である。ニーカィア宗教会議で定められたごとく三月の春分を過ぎてからの満月のあとに来る最初の日曜日に行うことになっているので毎年かわる。日本ではクリスマスのみを取上げて、復活祭はほとんど無視されているけれど、ヨーロッパ人にとっては、クリスマスに並ぶ重要な祭である。昔から伝わっている真正の復活祭を見たいといったら、フライブルクのウェルカー博士はミュンスターシュバルツァハ（Münsterschwarzach）の大修道院をすすめ、懇切に紹介までして下さっ

た。ここはバィエルン州ヴュルツブルクから約五十キロ、マイン河が蛇行してゆくところで大平原の真中にあって寂びしい村落である。ベネディクト派の大修院としてその典礼音楽はマリアラーハやオットーボイロンなどとともに知られている。

灰の木曜日以来喪に服したようにひっそりと静まっている修道院であるが、むろんミサは行われている。ここにいるわが子や兄弟、従兄弟の家族関係者とか、是非今年の復活祭をここでしたいと思う信仰篤い人々は附属の教会のミサに集って来る。「嘆きの土曜日」の夕方のミサはまことに簡単で、いつものような讃歌も歌わない。祭壇の中央の両手をひろげたキリスト像をはじめ、十字架や聖者像には皆黒い布でかくし、キリストの死を悲しむ。鐘は一切鳴らさず、パイプオルガンも奏さず修道士が木製の鳴子のラッツエンをはげしく鳴らし、夕べの務めを終えた修道士たちはいつものように列をなさず、散りぢりに大修院の方に帰ってゆく。キリストの死を悼む表現か、あるいはキリストから散りぢりに離散した惨めな使徒を表わすものかであろう。すべて鐘もオルガンも皆ローマの方へ飛んでいってしまい、この世の秩序や調和が失われてしまった表現である。

やがて十時頃になる。四月半ばとはいえ、内陸部の平原は夜になると冷え込みがきびしくなるが、手に蠟燭を持ち、きちんと黒い式服を着た男性、ヴェールをかむった女性たちが大修院の石段を踏んで教会の中に吸い込まれてゆく。灯が消してあるので外ばかりか、重い扉を開けた内部も暗く椅子に腰掛けるのもおぼつかない。次第に人々の姿も増え家族揃ってくる人もいれば、若いカップルがはじめての祝福を受けにくる場合もある。ミサがはじまるのをじっと待っている人々には、これから劇的な儀式に加わる喜びを内に秘めているらしく、長いと思っている様子は感じられない。やがて仄かな灯も消え、会堂は真の闇となる。大修院の院長はじめ多くの神父、司祭も揃い、ミサがはじまる。連禱や歌が交互に起り、復活の喜びと祝福の意味の言葉を院長が語る。すると正面の扉から修道

士たちがしずかにはいって来る。昔からのしきたりどおりに、石とたがねを打ち合せて発火させ、ホクチに火をとり、これを燃え上らせ、復活祭の象徴ともいうべき大きな蠟燭に先づ点火し、修道士たちの手にする小さい蠟燭に明りをつぎつぎとうつしてゆく。やがて壮重なパイプオルガンの高鳴りとともに光の列は祭壇へと進んでゆき、祭壇の蠟燭につぎつぎと光がともる。柱にも壁にも沢山の燭火がまたたき出し、信徒たちの手うつしでたちまちのうちに全体に火がともり、内部は光の花が咲く。まさに光の海である。

キリストが復活した喜びが一杯になり、会堂の聖像や十字架をおおうていた布や幕はすでに降ろされており、祭壇は白百合やカラーなどとりどりの花で満ちている。お互いに「おめでとう」と隣の人々と挨拶する。とくに若者と若い娘が感激に紅潮して「復活祭おめでとう」と握手する。

主をほめたたえよ、わが魂よ
なんじわが神、主、なんじはいかに大いなることぞ
高きとかがやきをよそおい給い
天と地になんじの栄光満ちたり
ハレルヤ　ハレルヤ　ハレルヤ

さらに行進してゆくときにつぎのように歌ってゆく。

キリスト、殉教者すべてよみがえりたり

われらみなこれを喜ばん
キリストはわれらの慰めなり、キリエレス

彼もしよみがえらずば、世界は空しからん
彼よみがえり、存在するすべてのもの喜べり　キリエレス
ハレルヤ　ハレルヤ　ハレルヤ
われらすべて喜ばん
キリストはわれらの慰め、キリエレス

この歌は一五五一年の頃から歌われている。ミサが終ると教会で点した蠟燭を風に吹き消されぬように気遣いながら、家路につく村人もいる。復活の前夜の務めを終えた修道院の人々もほっとした面持ちである。夜更けの修道院は月光に照らされて再び静寂に帰ってゆく。落ち合う川の流れの音だけがきこえ、白い林檎の花が印象的である。

翌朝復活祭の日曜日の朝のミサがおこなわれた。無事復活祭を迎えた喜びで人々は皆明るい表情である。今朝は昨夜の祭よりも人出は多く華やかである。

われよみがえり、つねになんじとともにあり、ハレルヤ
なんじの手をわが上に重く置きたまえ、ハレルヤ
いかなる奇蹟、おお神よなんじを知ることはハレルヤ

そして、復活祭に小羊を犠牲に捧げ、これによってあなたがたは潔められたと歌う讃歌もある。カーネーションや薔薇、フリージアなど祝いの花を少女たちはもらって出てゆく。心なしか復活祭の朝は大気も澄み、麦畠や森も静穏な気分である。修道院もこの復活祭の朝のミサの務めが終ると、自由に家族や親戚知人などと面会できる、修道士たちにとって一年で一番待ち遠しい日であろう。花束や慰問の品などをかかえて面会に来た人々との談笑があちらにもこちらにもひびいている。

復活祭の民間習俗

キリスト教会の復活祭の行事とならんで一般の民間においてもさまざまの行事がもよおされている。そこでまず復活祭という言葉の用法について考察したい。日本語で意味をとって復活祭と呼ぶ。「イースター」(Easter)、「オステルン」(Ostern) は元来は「春の祭」ということである。八世紀頃の司教ベダ・ヴェネラビリス (Beda Venerabilis) によると、これらの言葉の源となる「オステラ」(Ostera) 乃至は「エオストレ」(Eostore) は光り輝く曙の女神、昇りゆく光の女神であり、これに基づく古高ドイツ語のオストラ (Ôsterâ) は東方に太陽が再び昇る時を表わす言葉とも解する学者もいる。とに角オストラ、オステルの語群は時節や位置を表わし、春の女神を迎える祭であった。東洋でも東方は当然春を指している。春を迎えることは、よみがえる太陽を祝う祭であり、古代ゲルマン人も行っていた。これにたいし、キリスト教ではキリストの復活は自然と人間の生活を若返えらせ、更新するということから、積極的に祝うようになった。キリスト教ではキリストを霊的太陽と見做しており、春の太陽のよみがえり(若返り)とともに祝うのであるとも解される。キリスト教も太陽との関わりは大きく、たとえば週の最初の日は日曜日 (太陽の日 Sonntag) を「主の日」と呼んでいる。マグダレーナやガリラヤの女たちはキリス

トを埋葬して嘆き悲しんでいたが、三日目の日曜に墓所にゆくと空になっていて、キリストの復活を知る。このキリストの死と墓への勝利を祝って主の日となったのである。ユダヤ教の週日規定では神の天地創造が六日にしてなし遂げられ、七日目に休んだのでこれを安息の日（Sabbath）として聖別してきた。これにたいしキリスト教はこの日曜日を「主の聖なる日」と記念してミサを行い、土曜日（安息日）に行わない。かくて両者はこのように決定的に異る道を歩むようになる。そして週毎の日曜日は「小さき復活祭」となり、金曜日は「小さき嘆きの日」となった。クリスマスが太陽の誕生の冬至と一致しているように、復活祭も春となって太陽の蘇生、若返りと同一視され、不滅の太陽の喜びの祭の日となったのである。

したがって民間信仰としても復活祭はさまざまなことがいわれている。復活祭の朝はいつもよりも空が早く明るくなり、太陽はキリストの復活を祝い、三度喜びの踊りを踊るという。これは垣根の茂みをとおして見るとか、絹の布やうすい紙などで透かしてみるとよくそれが見える。メッツ地方では復活の喜びとして空にすべての色彩が現われ、太陽と雲が一しょに躍るといい伝えている。とくに緑の聖木曜日（Gründonnerstag）にきちんと精進した人には、昇る太陽のまわりで羊が踊るのを見るという。復活祭の日曜日がたまたま新月のときには、日の出前に三度主の祈りを唱えると、太陽が完全に姿を現わす前に銀色にかがやく羊が見え、この日は日没も青く見えるとかいわれる。復活祭の朝、太陽の中に処女が坐っていて、天の挨拶のしるしの花を大地に撒き散らしている。このように復活祭は祝福のときであるので、この日に生れた者は幸福だといわれ、この日に死んだ者も祝福される。

復活祭には一切の仕事を止め、それ以前に終らせてしまわなければならない。野山は春の緑が萌え新しい祝福が見られる。復活祭の緑の枝といって、とくに樅の枝を家畜小屋に挿したり、堆肥の上にひろげるのは、悪魔や魔女から家畜を守るためである。また若者たちが鞭でもってあちこちを叩く。これは古いものを破砕して悪い力を追い

出す行事である。復活祭の夜、ミュンスターシュバルツァハの大修院のマイン河の対岸の村落で「復活祭の火」を燃やしているのを見た。この火を春の火の場合と同じように「火の輪」をころがしたり、畑にたき火の灰をまいたりするところもある。教会で新しい復活祭の火を蠟燭にうつしてきて、祭壇に点すだけでなく、かまどの火も一度消して新しい火を鑽り出す。復活祭のかがり火もこれで燃やすのが正式な習俗となっている。これとならんで「復活祭騎行」(Osterreiten) といって豊饒を願って畑地を馬で乗りまわしたり、あちこちへ行進疾駆したりする。上部オーストリア地方では太陽の昇る前に若者や下男たちにできるかぎり速く畑を走りまわらせる習俗があるといわれる。この復活祭騎行は自分たちの手で村の境界や農耕牧畜のための土地の地形、状況を確かめる見廻りの騎行 (Flurumgang) ともいう。これも古代ゲルマンから伝わる豊饒祈禱の一形式であろう。

畑に灰をまいたり、馬で走りまわるだけでなく、若者や娘たちがかがり火のまわりで木の円盤とか球をもって踊る習俗がのこっている。これは太陽の復活を願う古代からの遺習とおもわれる。

復活祭の火とならんで「復活祭の水」(Osternwasser) がある。日の出前に冷い清冽な小川で顔を洗うと怪我も癒りが早く、健康で若々しくいられるといい、東の方に向って汲むとよいというところもある。水を汲むときおしゃべりをしてはならぬ。沈黙して汲むのでなければ復活祭の祝福はないと信ぜられている。復活祭の前夜真夜中に鐘が鳴るとき、ただ一瞬間川や泉の水がワインにかわる。ワインを飲みたい一心で舌を水に浸していたという話が各地に残っている。復活祭の火で燃やした灰と同じように、日の出前に馬を川に乗り入れて、その濡れたしぶきを畠にまき散らすと豊作になるといういい伝えもある。

復活祭の習俗で広く知られているものは、いわゆる「復活祭の卵」(Osterei) であろう。なぜ復活祭に卵が特別に取り上げられるか。こうしたことについてはさまざまの由来があり、多くの伝説や物語、地方ごとの解釈や風習

も生れてくるから、根本的な理由を抽出することは仲々困難である。とりあえず比較的妥当なことをあげれば、日日卵を産むといったような鶏が持つ旺盛な生産力が昔から人間にとって驚異であり、キリスト教的に見れば、卵の生命の再生更新、すなわち復活の象徴ということであろう。生卵よりもゆで卵にするのは、保存のためとこわれやすいのを防ぐためであろう。この卵を贈ったり贈られたりし、飾るのも風物の一つである。この卵の殻にさまざまな模様や絵をかいたり色を塗ったりする。中身を抜き出し、かわりに復活祭の挨拶にふさわしい詩句、親愛をこめた言葉を書いた紙片を入れる。幼い子供がたどたどしい字で書いた贈物は両親にとって成長の記録にもなる。ベルギーと境を接するアイフェル地方にキルヒヴァィラーというところがある。ここで若者が娘に贈る卵は、幸福を贈ることであるが、その数によって二個ならば「一寸した挨拶程度」、三つならば「感謝のしるし」、四つならば、「交際できる喜び」、五つならば「婚約」、六つが「結婚」の意志表示となっている。卵を通じて男女が心を通わせることが公けにできるので復活祭が待たれた。子供の卵集めの行事や卵割りや卵ころがしの遊びについては今更論ずるまでもない。復活祭の卵は兎が持ってくるとか、兎が生んだものとかいうことは、十七世紀末の医師ゲオルク・フランク（Georg Frank）の記録に、なぜ復活祭の卵が兎の卵（Haseneier）というかと問われ、子供や単純な頭の人々にたいしてはそんな風に説明して大笑いしたということでも明かである。兎はとくに復活祭の頃、牧草地や野山でよく見かけるようになるし、他の動物の間にひそかに生存しながらその繁殖力は注目されてきた。とくは兎は愛の女神アフロディットの寵愛する動物であり、ゲルマンでは大地の女神ホルダ（Holda）を先導する動物とも考えられている。復活祭を祝う習俗は、ゲルマンの春の祭をその中に包摂し、さまざまに豊かに文化を形成していったことがうかがわれる。

復活祭から一週間後復活祭の、第二日曜日は「白い日曜日」（Weißer Sonntag）と呼んでいる。この日に少女

や少年たちが堅信礼（Konfarmation）を受ける。少年も白い長い服を着るが、とくに少女たちは純白のレースの衣裳に白靴を履き、白いレースの花飾りで髪を飾り、白いヴェールをかむり、白い布に長い蠟燭を持ってこの式典に参列し、復活祭にふさわしい清々しい風景をくりひろげる。この日少年、少女たちは両親や祖父母、親族に伴われて教会へぞくぞく集ってくる。幼児洗礼は受けているが、長じてはじめての第一の堅信礼である。キリスト信徒となるための教理問答をよく学ぶことが前提となっている。この日を祝福して少女たちの家の戸口に白い砂を撒き、緑の葉をしきつめる心づかいをする家が多い。少女たちは純真無垢そのままの白一色の姿である。ミサが終ると蠟燭に教会の火をうつして行列をつくり、讃美歌を歌うコーラス隊とともに町や村を行進する。彼等を祝福する先輩や青年たちがその家ごとに樅の若枝を挿し、花づなを飾る。この日に記念樹として教会の墓地や緑地公園に果樹の苗木を植えるところもある。信仰が苗木とともに力強く成長して欲しいという願いである。この日子供達は家で御馳走を食べ、叔父叔母などからもプレゼントを受ける。成長の節目を喜ぶ一日である。丁度この頃カスタニアがどこにもシャンデリアのように白い花を咲かせる季節で春も一層深みを増してゆくようである。

聖ゲオルクの日（四月二十四日）

聖ゲオルク（St. Georg. ジョージ、ヨルグ）は小アジアのカッパドキア出身の騎士でローマ皇帝ディオクレティアノス帝に仕えた。ひそかにキリスト教に帰依していたことが分り、帝の迫害のもとで三〇三年頃殉教を遂げたと伝えられる。この聖者については歴史的なものと伝説的なものとが融け合っている。民間信仰の上で親しまれているのは、悪竜退治の伝説である。パレスチナの近くのシレネ（Silene）に悪竜が棲み、つぎつぎと人身御供を要求し、ついにこの国の王女を差し出すことになった。湖のほとりで泣いている王女を見て騎士ゲオルクは毒気を吐

く悪竜と激闘の末に退治し、人々の難儀を救った。この悪竜と闘う聖ゲオルクの勇敢な姿は、好んで絵画や彫刻などに造型されていて、ゲルマンのジークフリート、ギリシヤのヘラクレス、ペルセウスなどと同じように悪竜怪物などと闘ってこれを制圧した勝利者、キリスト教における英雄、自由の戦士の性格をもつに至り、ついに救難聖者となった。騎士、戦士の階層から篤く信頼され、甲冑、武器製造者からも崇拝され、聖ゲオルゴス騎士団も生れ、英国では紳士（Gentlman）の守護聖者ともなり、さらに馬の守護聖者ともなった。悪竜と勇敢に闘う姿は、たんに自然のデーモンとの闘いだけでなく、悪のサタンや異教と闘う信仰者の理想像となるに至った。

ゲオルクが殉教を遂げたこの四月二十四日は、東欧地域やスラブ地方は丁度春の始まりになる。雪融けのあとの庭を手入れし、森にカッコウが鳴き初め、熊が穴を出る季節である。五月祭のメイポールを建てはじめる。要するに中部ヨーロッパよりさらに遅れて到来するこの地方の春の始めの目安になるのでとくにこの祭は重要視される。ロシアの農民たちは「緑のゲオルギー」といって白樺その他の若葉で身体をおおうた村の若者を村中を連れ歩き、最後に川の中に投げ込んで春の到来を祝福した。これによって野山に緑が一斉に萌え、温かい雨をもたらすと信じた。インタール（Inntal）地方の村ではこの日子供達が牛の大きな鈴をつけてあちこちの牧草地を走り廻る、あるいは鐘を鳴らして騒ぎまわる。春とともにさまざまの悪い自然の精霊やデーモンが力を持ってくるのを防ぐ。子供達が牧場や畑を走ると草に憑くデーモンを追い払い、よい牧草になる。むろん子供達は御馳走に与る。元来は大人や若者たちが行った行事が子供へ移行したのである。また村めぐり（Flurgang）と称して司祭や村の主だった人人が村の各地を馬に乗って巡視する行列もある。村全体が異常ないか、他から侵害されたり、盗伐にあったり、地形が崩れたりしていないかを確認する。ゲオルク行（Georgritt）も馬に祝福を与えるためであるが、春の祝福の祈願をこめたものが多い。ゲオルクの鞭による家畜放しの行事や狼などの野獣を監督する聖者の役割などについてはす

でに詳しく触れているのでここでは割愛する。救難聖者ゲオルクにたいする古い唱え詞につぎのようなものがある。

雄々しき英雄のキリスト者　ゲオルクよ、
あなたの誓いと願いにより、多くの不安の中にあるわれらを救い給え、
あらゆる苦難や魂を滅ぼそうとする強い不安をあなたは打ち砕く、
あなたの祈りによりてわれらを救いたまえ、
聖ゲオルクよ、われらは喜んであなたの誠実なる闘いを崇めます。(8)

五　月

五月（Mai）はメロヴィンガ朝の頃、ラテン語の「マユス」（Maius）を取り入れて「マイエン」（Mayen）、「マイ」（May）となった。「日の長い月」（Lenzmonat）、「希望と愛の月」（Monat der Hoffmung und Liebe）でもある。

クルーゲの語源辞典によると「Majus」は jupter majus で成長をもたらす神、あるいは「女神」（Maja）に基づく。major（より大きくなる）大の月として一月、三月、八月同様にこれをつけて呼ぶ。もっともラテン語では「アイ」（ai）は Maie, Meie「喜び」の意味で「喜びの月」（Wonnemonat, Winne）ともいう。敬虔なキリスト教徒は「マリアの月」（Marienmonat）とも呼んでいる。「五月よ、美しき五月よ」とはハイネの詩の言葉であるが、「すばらしい」（Majjor）とか喜ばしいとかいう気持はこの月の名そのものにあり、ヨーロッパ人は五月にたいして特別な意味と気分を抱いている。

美しき五月よ、ようこそ！
またお目にかかりますね
老いも若きもあなたの授ける
花飾りを喜んで受取ります
可愛い小鳥は明るく歌い
ナハティガルはよい喉をきかせてくれる

冷たい風も吹かず
空は青く蜜蜂の群は
緑の牧場をうなって飛び
すべては新しくよみがえる
おお五月の悦びよ
あなたはかぎりなくやさしさを
わたしたちに与えてくれる(9)

ヨーロッパ人の手放しの五月の讃美と陶酔は長く厳しい冬を前提にして考えなければならぬ。ヨーロッパの風土は冬は暗く、曇天が多く、雪や氷に加えて劇しい嵐が吹き荒れる。この世界から太陽が消え失せ、再び春が来るとは思われないほどに惨澹たる状況となる。それだけに春の到来の喜びは大きく、その絶頂の五月にはおのずと歌い

踊り出したくなる。五月柱（メーポール、マイバウム）を立てて踊りあかす習俗は無理からぬことである。たしかに五月はたえずさわやかな微風が吹き、白樺の若葉が村をつつむ。いたるところに野芥子、矢車草、薔薇が咲き、カッコウその他の鳥が鳴く。ここに至って生きていて良かった、冬の苦しみを耐えた甲斐があると思う。冬が不安定で自然が猛威を振うのに比べ、春から夏秋にかけては気候は安定し、風雨も温和で夏の頂点へとすすみ、成熟の秋にはいってゆく。ヨーロッパの年間習俗や行事が夏型と冬型に截然と分けられ、両者のコントラストは劇的な形態をとるのは尤もなことと思う。したがってヨーロッパでは夏型とは春夏秋の三季を含み、冬型は文字通り冬だけである。

さきに「ヨーロッパの四季図」でもふれたように、春を告げるものにコガネムシ（コフキコガネ）がある。春の使者である。親しまれているいくつかの子供の歌がある。

黄金虫よ飛んでゆけ、飛んでゆけ
おまえの父さん戦場だ
おまえの母さんはポンメルラント
黄金虫よ飛んでゆけ

黄金虫よ、飛んでゆけ、飛んでゆけ
おまえの父さん戦場だ
おまえの母さん長靴はいてはいまわり

左の脛が折れちゃった
黄金虫よ、飛んでゆけ！(10)

ポンメルラントはバルト海に面した港町でドイツが東方へ開拓進出した歴史を思い出させる。ポーランド、オランダ、ヘッセンランド、シュヴァーベンラントなどとさまざまに名をかえて歌うこともある。黄金虫の生態をよく観察した童謡であり、五月を迎えて虫にまで語りかけている喜びも感じられる。とに角五月にはさまざまの楽しい習俗があり、その最大のものが五月柱の歌と踊りである。

五月柱の習俗

原始時代には人間は数百年、千年を経た老木、巨木を神霊宿るものとして崇め、また年ごとに新しい若葉をよみがえらせる樹木を生命の象徴として貴んできた。大家族や共同体の集落の人々は事あるごとに神聖視する老木、樹木のもとに集って協議したり、食事をともにした。この樹木を介して天地の神を祀った。ゲルマン人たちはとくに樹木信仰は強かったことは、聖ボニファティウスの伝説でも明かである。ところが樹木をきりたおして、これを五月を迎える象徴として町や村に運び込んでこれを広場、教会の広場に建てこれを「五月柱」(Maypole, Maibaum Maiyen) と呼び、このまわりで男女が歌い踊るようになった。よみがえった若くして新しい太陽のもと、若葉と鳥の囀る中で春を謳歌するのである。この五月の月全体が祭のように楽しい日がつづく。そして五月柱とも関連してさまざまの習俗があるので、順を追うて取り上げてゆくことにする。

四月二十四日、聖ゲオルクの日の頃、白樺や樅の若枝を切ってこれに花を添え、好意を寄せる娘の家の窓に若者

が挿してゆく。あるいは布やきれいな紙を飾ったり、卵を吊したりして窓べにしっかり、気付かれぬようにしばりつけてゆく、これがそのまま「五月の若枝」（マイエン Maien, Maibuschen）につながる。あるいは聖ゲオルクと無関係に五月一日のために行うことが多くなった。窓とはいわず、戸口や扉に挿すこともあり、娘ばかりでなく、その家への好意や祝福をこめたものもある。むろん若者同士の間では結婚の約束を示すものとなることもあり、シュヴァーベンでは堆肥にモミの若木を植え、未来の子孫の繁栄を願うやり方もある。

今日では五月一日の夜明け、子供たちは村はずれの森に「五月迎え」に出かける。緑の若枝を折り取り、年のはじめに咲いた野草の花を摘んで花束を作り、日の出とともに村に帰り、その緑の枝で戸を叩き五月の祝福をして褒美をもらう風習もある。むろんこの仕事を若者がしてこれを窓に飾ることの方が古い形態である。この朝草の葉の露をあつめて顔を洗う娘もいる。美しくなるといわれ、健康にもよいといって飲む習俗もあった。この五月の朝露をぬらすとシミ、ソバカスも消えるという俗信もあり、つぎのようなまじないを唱える。

ヴァルプルガさま、わたしのソバカスを差し上げます。何卒何卒お受け取り下さい、同時にわたしのものをみな取り去って下さい

色白の子供には概してシミ、ソバカスが多く、悩みの種の一つである。この五月一日の夜明けに湖川で水浴する習俗もある。シュヴァルツヴァルトの村の青年たちはこの日の夜一時、二時頃各自馬に騎って森の奥に行き、教会の讃美歌や五月の民謡などを歌い、日の出とともに村に帰ってきた。しかしこういう良い習俗もなくなり、ゲステハウスに飲みにゆき歌い騒ぐようになったのは残念だという古老もいる。五月の花嫁花むこ、五月伯と、五月伯夫

人選びのことは余りにも広く知られているのでここでは省略したい。

五月柱は樅、唐檜、唐松などかねて目印にしていたものをきりたおし、頂点のみに枝葉を残し、あとは取り去る。これを四月三十日運び出し、夜明け前一時頃には広場に建て終える。他の町や村から襲われてたおされたり、略奪されることは恥辱であるから、見張りを立て厳重に青年たちが守る慣わしもある。運び出しは牛や荷車を用いるが、屈強の若者が大勢でかついで来ることもある。柱の尖端に緑の枝葉を残しておくことは、元来樹木として立てることを目的としたものであるが、持ち運びが大変なので一部分のみに本来の姿をとどめたのであり、柱ではなかったことを示している。むろん数十人の若者によって押し上げ、引張って立てるのであるが、白樺や樫のように一、二名の手で立てる簡単で小さい五月柱もある。しかしこの五月柱には樅の葉で編んだ輪を作り、青白、紅黄の布を飾り、人形や紙でつくった花をつけることが多い。これらは娘たちの丹精による。最近ではパン屋、靴屋、農家、人形、道具を鋳ぬいた図柄のものを柱に附けている。これらは飾りとなる以前その家や道具に新しい生命と幸福の祝福を願ったものであることを示す。若い娘たちが夕方になると蠟燭を持ってきて火を点し、踊りがはじまる。五月柱の幹はすっかり皮をはいで、滑らかになっており、上のクランツにさまざまのものを飾り、豊饒祝福を祈るのである。幹を滑りやすくするのは、カブトムシに化けたデーモンを近付けないためであるという説もある。この柱のもとでの踊りは若い者にとってもっとも楽しいものである。大抵輪舞であり、組踊りである。マイマイ踊り（Schnecke）といって五月柱を中心に螺旋状に輪を画き次第にその輪を小さくして全員が草の中にたおれてしまう踊りや、逆にまた大きくしてゆくなどの踊りである。また垣根踊り（Zaun）は娘たちだけで交互に手をとって輪を作って踊りながら次のように歌い、輪を大きくしたり小さくしたりする。

さあさあ垣根を結いましょう、
一つ垣根を結いましょう、
わたしたちの〇〇さん（女性名）は可愛くてすばらしい、
垣根が立派にできましょう。[11]

「橋」（Brücke）はペアの男女が踊りおわると手をアーチにあげ、つぎの男女がくぐってまたアーチをつくる踊りである。ベンデルタンツ（Bändeltanz）といってとりどりの長いリボンを持った娘たちがいろいろ綾や結びをつくって踊ながら行進し、最後に五月柱のまわりを踊る。この花綵（Girland）を五月柱に結び踊りながらさまざまに綾（あや）をつくる踊りもある。こういった踊りは当然子供たちの小さな五月柱でもおこなわれる。この世に生きている喜びを謳歌する五月はたくさんの民謡に歌われている。作者不明の古くから歌われている民謡もあるが、特定の詩人の詩が作曲されて広く民衆に親しまれているものも多い。

さあいらっしゃい、愛する五月よ
わたしたちのために樹立を緑にし、
小川のほとりに小さなすみれを咲かせて下さい！
わたしたちはすみれをまた見たい
ああ愛する五月よ
また再びあちこち野山をさまよいたい。[12]

この「来れ、愛する五月」(Komm lieber Mai)はモーツァルトが曲を附けているオーバーベック(Ch. Overbeck)の詩である。

五月がやって来た、さあ樹を切り出せ
楽しいと思う者はここに来なさい
心配ごとは家にのこし、
雲が空のあちこちをさすらうように
わたしの心も遠いはるかな世界にさまようのだ[13]

「五月がやって来た」(Der Mai ist Gekommen)は歌詩はガイベル(Ei Geibel)、メロディーはボヘミアの民謡のものでリラ(W. Lyra)の編曲による。

つぎに「五月はすべてを新しくする」(Alles Neu Macht der Mai)の詩は広く親しまれ、いつでもどこでも歌われている。

五月はすべてを新しくする
魂を生きいきと自由にする
家を出て外に出よう
花環を編もう

日の光がまわりにかがやいている
牧草地も森も香るようにきらめき
鳥の声
角笛（ホルン）のひびきが森からきこえてくる。(14)

この詩はカンプ（H von Kamp）が古い民謡の曲にもとづいて作詩したものである。一八一八年頃の作といわれている。ここにあえて五月に歌われる民謡をあげたのは、五月のいかなる散文的叙述や措写よりも心や気分に訴えるものがあると思うからである。

五月柱（あるいは五月の若枝）の習俗は、記録の上では一二二五年カール大帝即位の地アーヘンでおこなわれたことがのこっているが、ゲルマンの昔からあったと想像できる。樹木や枝を切って家の前、窓などにたてて、聖なるものの訪れを迎える習俗はかなり古いものである。すでにギリシャ・ローマの古代社会で家や畜舎に緑の木や枝を挿して病気や悪霊を防ぐ習わしがあった。ヨーロッパにおいてもクリスマスツリー、新年、リヒトメッセに立てるアダムの木、夏迎えのレターレに夏棒（又は木の枝）を携えて行進する行事、聖霊降臨祭にも若枝を挿すように（その他この習俗は自然に本能的に愛好され、現在では多くの祭で飾っている。）人間は新しい自然の春（夏）の生命力に直接身や自己の環境に触れることにより、自分や家畜にも生命力を増加させ、悪霊や病気を防ごうとするのである。これにならんで「五月の火」（Maifeuer）といって五月一日（又はその前夜）穀物、家畜の繁殖をねがい、火を燃やし、ヘクセやデーモンを追い払う行事をおこなうところがある。わざわざいぶらせて煙を多く這わせ、騒いだり荒々しく走ったりする素朴な行事である。

聖霊降臨祭

キリストが捕えられて十字架上で死を遂げたのち復活する。キリストの受難のときは四方に逃げ散った使徒たちもキリストの復活に遇うや、五十日を経て聖霊が降って力と勇気を得、宣教と伝道に身を挺するようになった。「聖霊があなたがたに来ることによって、あなたがたは力を受け、わたしの証しをするであろう」（使徒行伝一ノ八）とあるがごとくである。それゆえ復活祭から五十日目にこの祭を行う。この祭の名は「五十日目の祭」（ペンテコステ Pentecostes）である。聖霊降臨は意味によって名づけたものである。キリスト教では神、キリスト、聖霊一体の教えの中で、キリストの受難と復活の成就ののちに、聖霊が人間に与えられて完全になり、教会（エクレシア）が基礎づけられ、この共同体の内的規律も生れる。いわば信仰者の信仰と教会の誕生を祝福するものである。神の子の誕生を祝うクリスマスが種子であれば、復活祭はその開華であり、聖霊降臨祭はその実の収穫ともいうべき祭となる。このペンテコステは元来ユダヤにおいては春ののちの最初の収穫祭ハグ　ハカシィール（Chag hakkasir）といい、のちにはシャブオート（Shabvot）と呼んでいる。過越し（Passach）の祭から七週を経て五十日目の小麦の収穫の祭であった。

聖霊が人間に宿り、目覚める喜びの讃歌は沢山歌われている。

愛の光をもてる聖霊よ
おんみはわたしの魂を照らし
もはや冷たきものなく

暗きにとどまることなし

神と一つなる聖霊よ
おんみはわたしの魂を目覚す
わたしはつねにおんみの声をきき
おんみにつき従ってゆく[15]

（エリーザベット　フォン　シュミット　パウリー）

七つの焔の神よ、大地の面（おもて）に
再び降り
われらの疲れた心に
新しい信仰と焔を燃やす

七つの焔の神よ、燃えよ
血と傷によりてすべての崩れしものや
疲れや病いを照らして
健やかならしめ給え！[16]

（マルガレーテ　ゼーマン）

聖アウグスティーヌスの祈りにつぎのようなものがある。

聖霊よ、わたしが聖なるものを考えられるように
わたしの中に息づき給え！

聖霊よ、わたしが聖なることを為しうるように
わたしをかり立て給え！

聖霊よ、わたしが聖なるものを愛し得るように
わたしを魅惑し給え！

聖霊よ、わたしが聖なるものを守れるように
わたしを強め給え！

聖霊よ、わたしがおんみを失わぬように
わたしを守り給え！[17]

これらの詩や祈りによって端的に聖霊がどのように受けとられていて、何を願っているかが明らかなように、それは「かくれたる神秘」聖なる愛、愛の完成である。

教会の誕生を祝うこの祭はシチリアでは昔から教会の塔から薔薇をふり撒く慣わしがあった。復活祭から五十日目のこの聖霊降臨祭（フィングステン、Pfingsten）に至る間はすべて「喜びの日々」である。家毎に聖霊が宿るように白樺の若枝を窓や戸口に飾る。戸を開けたままにしておくところもあり、この日には農家の人々は畑に出ない。聖霊が畑に豊かに注ぐのをさまたげないためである。

再びフィングステンの祭となり
再び愛の精神が近付く
貧しき者、乏しき者も
皆慰めが保証される

花々はいたるところにさき
気高き花も同じように咲く
愛の言葉が
新しい天国を告げる

マイエンの枝や花で冠を編みましょう

祖先のすばらしい慣わしにしたがって
これを家や戸に飾ろう
むろんわたしたちの心を飾ろう！

何故なら愛の精神は
浄らかな精神にかえり
愛の心だけがとどまって
神の子がここに在すことを教えるからである

（ハインリッヒ　ホフマン）[18]

フィングステンの日に生れる子供は幸運であり、この日に死んだ人はよき人生を過した人であるという。このフィングステンの間天国の門はすべて開かれて地獄の門は閉される。魂は努力せずに天国にゆくことができる。フィングステンの日に雨が降ると、牧草地はよい草が生え、穀物、野菜もよくなるといって喜ぶ。古い習俗として下オーストリアのヨッブスタールではこの日の朝村の若者たちは馬に騎って山に登り、頂きから「聖霊よ、降り給え」と大きな声を発する。これを「聖霊迎え」という。家畜の牛、馬、羊に花や緑の葉を飾りつけて村や牧草地を牧人が連れてゆくのも、寒い北の地方では家畜の追い出しの祝福がこの聖霊降臨祭に当るからである。

白樺の若枝を窓に挿したり、また五月柱をこの頃再び立ててそのまわりで踊ったり歌ったりするように、フィングステンは五月一日以来の祭の連続であるといってもよいし、寒い北国ではこの頃が五月一日（メーデー、マイタ

ーク）の再演であるとも解せられる。またフィングステンの泉といってこの日に泉の水を飲むと幸福になるといわれ、小川などで朝早く水浴すると諸々の病気やけがれを除き、眼病を癒し、眼の力を強めるといい伝えている。このように農事のための雨の恵みを求めることと、水による浄めにちなんで、この期間に洗礼を受けるのが良いという地方も沢山もある。

ここでは北バイエルンの森の地方で今もおこなわれている珍しい「フィングストル」（Pfingstl フィングストさん、フィングストル迎え）の行事を述べておきたい。フィングストルは人間の姿ではなく気味の悪い存在者である。二人の村の若者に連れられて森や山からやって来る。身体を白樺の若葉の枝をびっしりつつみ、樹皮でつくった仮面をすっぽりかぶっている。これはフィングストルの花むこの異教的な祖型かもしれない、村のあちらこちら連れ歩き、最後に小川の中に投げ込んだり、水を瀉ぎかけたりするので、やはり古いゲルマンの豊饒を願う呪術と考えられる。「水鳥の歌」（Wasservogelsingen）と同じ型のもので、聖霊降臨祭の夜若者たちは家から家へとこのフィングストルさんを引き連れ歩いてつぎのように歌う。

聖霊降臨祭の夜は眠られぬ
わたしたちはあちらこちら歩き廻ります
緑の牧草地をさまよい、主キリストに出合います
緑の牧場をさまよい、聖母マリアに出合います
夏棒が近くの家を示し、樹木が少し歌い
荒れた風を鎮めます

ここの農家はよい住まい……[19]

こんな風に唱えながら馬合羽、雨合羽をもち、ときには消火器か古い鉄兜もそえて家の前に立つ。そして「上からの祝福」の雨が程よく降ることを乞い願う。彼らはおいしい卵料理を御馳走になり、沢山の施しを受ける。御礼をいい、「どうかよい降臨祭をお過しなされ、倉もよく納まり、よく眠りなされ」といいながら立ち去るのである。

聖エングルマールの行事

チェコとの国境に近いバイエルン北東部には珍しい習俗がある。ドナウ河に沿ったボーゲン（Bogen）の町の北にシュタインブルク（Steinburg）の町があり、そこから十七キロバイエルンの森林のひろがっているところにエングルマールの村がある。かつてはロードングスドルフ（Rodungsdorf）と呼んでいたが、ここに聖エングルマール（St. Englmar）という聖者を祀る巡礼教会がある。この聖者はこの村でしか崇拝されていない。現在では聖者の名を村の名としている。一一〇〇年頃聖者はこの森に来て孤独な隠遁苦行の生活をしていた。ボーゲンの領主とその奥方はこの行者に篤く帰依し、彼の勤行が果されるよう生活の糧を送りとどけることにしていた。エングルマールの宜教はこの地方の村民に篤い信仰心を起したといわれる。ところが彼の信仰心に嫉みを感じた従者が祈っている彼を殺し、屍を森の中に埋めた。しかし村の伝説によれば、天が開け、そのとき彼の徳を讃える天使たちがこの殉教の聖者の魂を受け取って、神の国へ昇っていった。天使の歌声と光のかがやきで彼の遺体の在り家が知られ、これを牛の車に乗せて帰っていった。しかし途中、動物が立ち止って動こうとしなくなった。そこを墓所と定め聖堂を建てた。これが現在聖エングルマール監督巡礼教会である。聖者の遺体を発見したのが、聖霊降臨祭の朝であ

ったといわれる。

そこで毎年聖霊降臨祭の月曜日に村ではエングルマール探しの行事が行われる。降臨祭の日曜日の夕方、聖者像に沢山の蠟燭をともして祀ったのち、数人の人々が月曜日の夜明け頃その木彫りの聖者像をひそかに森に運び埋めておく。朝十時頃ボーゲンの領主と奥方に扮した人々が美々しく飾った馬に乗って先頭に立ち、そのあとに従う騎士や村の人々が短白衣（Chorrock）を着てつき従う。その他にヴィントベルクの修道士もあとを追う。気の荒い二頭の牛に車を索かせている。一行はあちらこちら森を探し、一緒に連れていった犬がついにその像の所在を探しあてる。人夫あるいは司祭に扮した村の若者が掘り出して車に乗せ、聖者を讃える歌を歌う。伝説のごとく、天使に見立てた白い衣裳の少女たちが二匹の仔羊をつれ、蠟燭をともして聖者をかこみ、讃美しつつ、この行列は教会へ帰ってゆく。おごそかなミサがおこなわれ、村は祝いの声につつまれるのである。

このバイエルンの森は西ドイツでは開発のもっとも遅れている地方であり、原始的な森がのこっている。エングルマールの村はおそらくかつては人口稀薄で他から隔絶していたところと思われる。聖エングルマールは天候不順、雷などから人間を守る守護聖者であり、不慮の死、ペスト、飢餓、戦争、救難聖者であり、豊作物家畜などを守る役目も果しており、他の地域とちがい一人で沢山の守護の役目をになっている聖者である。彼にたいする祈りの詞や歌がいくつかある。その一つをあげてみよう。

森の父のエングルマール、われらの牧場の守護者よ
われらがあなたを見るまで
あなたは神の座の近くにあって

あらゆる苦難の中にあるわれらを守り、
われらを浄き死へ導き給え！
おお聖なるエングルマールよ[20]

エングルマールの歌といわれるものがある。これは前者に比べて新しい巡礼歌である。

緑のバイエルンの森の中に高く
聖エングルマールの御堂が立っている
きよらかな歌のひびきとともに
多くの敬虔な巡礼者がゆく
やさしき聖者よ
われらはあなたの聖なる画像のもとに立つ
やさしき聖エングルマールよ
暗い森にまたたく星よ！[21]

殉教の聖者を発掘し教会へ運んでそこに再び祀るという行事は、幾度も忘れがちで弱くなりがちな信仰をよび起し、聖者への感謝を表わす敬虔な習俗といえよう。

マリアの泉

ヴュルツブルクの北東約十キロのところにマイトブロン（Maidbronn）という小さな村がある。ゆるやかにうねる丘陵と森林のつづく谷の村である。ここにリーメンシュナイダーの最後の作品「嘆きの群像」（Beweinung）がある。この村の教会は元シトー派の女子修道院であった。元来この村の名のマイトは Mädchen 乃至は処女の意味で、ブロンは泉（Brunnen）である。村を流れるプライヒアッハ川の源に泉が湧出している。ヨーロッパにはマリアの名を冠した泉が圧倒的に沢山存在して枚挙にいとまないほどである。

そのためここでは一つの聖泉を例としてあげておくことにしたい。同じヴュルツブルクからマイン河の流れに沿って北西十二キロのところにレッツバッハ（Letzbach）というささやかな聖母巡礼教会がある。伝説によればこの近くの領地の騎士が谷間で兎狩りをしていたところ、洞窟を発見した。その中にはいってみると聖母像を掘り出した。これを崇めて御堂を建てやがて巡礼者が訪れるようになった。幼子を抱く聖母像は十三世紀頃の素朴な木彫で現在レッバッハの教会の祭壇に祀られている。「緑の谷の聖母」（Muttergottes des Grünen Tales）と呼ばれている。第二次大戦後「キリスト者一致のための祈りの場」と定め聖日、祝日にはこの巡礼教会にさまざまの宗派教派を超えて人々がミサに参集する。会堂に収容しきれないので野外ミサも行っている。ここには十四、五世紀頃から巡礼がさかんになっていったらしいが、とくに熱烈になったのは十七世紀である。十六世紀中葉から宗教改革、農民戦争、三十年戦争などが相つぎ国土は荒廃し、人心もすさんだ。このような戦乱と荒廃の中から人間の精神、とくに宗教的なもの、信仰を復興させなければならぬと考えたのは、ヴュルツブルクの中興の英主といわれる司教ユリウス・エヒター（Julius Echter）であった。彼は宗教的敬虔を確立するために巡礼をすすめた。彼自身

率先してゆかりの聖地、聖泉に巡礼をおこなった。彼の遺志を受け継ぐ人々によりいつの間にか多くの巡礼歌が生れた。とくにこのレッツバッハは緑の谷の聖母の巡礼地として彼がいく度も訪れたところである。つぎの詩はその巡礼歌の一つである。

マリアよ、わたしたちはあなたに導かれ
山を越え、谷を歩いて
あなたのみもとにたどりつきました
今すべてを見出した喜びで一杯です
美しき緑の谷のマリアよ！
おお喜びの中の喜び
あなたのみもとに来て
一切の苦しみは消え
あなたを見つめる御堂の中で
かぎりない教えと模範を見出します
マリアよ、美しき緑の谷のマリアよ！

巡礼者たちはこのような歌を歌いながら歩みつづけ旅をする。巡礼も漫然として存在しているのではなく、時代毎、地域毎季節にもとづいての宗教運動の一つである。

わたしがレッツバッハを訪れたのは、マリア誕生の日九月八日のミサの日であった。教会の奥の谷間には清冽なせせらぎが砂地を流れていた。そこに泉が湧き出ていた。その泉はさわやかで美味である。そこに聖母像が彫ってあり、文字通り「マリアの泉」(Maria Brunnen) である。ヨーロッパに水道飲料が普及したのはさして古くはないが、概して大陸の生水は飲めない。飲めても美味しくない。硬水が多く、石鹸で身体を洗うと次第に泡が消えてしまう。わざわざミネラル・ウァッサーを求め、ワイン、ビール、ジュースが発達したのも水代りに喉を潤すためでもあった。とはいえ人間は飽くことなく自然の霊妙な美味で健康に効く霊泉を求めつづけてきた。ヨーロッパの巡礼地となっている聖地をよく調べてみると大抵よい泉の湧き出ているところが多い。このレッツバッハの泉も聖母像の発見よりはるかに古く「聖なる泉」として知られていたのではあるまいか。ここの泉は胃病によく、眼病に効くと広く知られている。今世紀発見されたルルドの洞窟の霊泉はいうに及ばず、アルトエッティング、マリーエンタール、エヒテルナッハ、マリアツェルその他巡礼地には数えあげればきりがない。ヴュルツブルクの周辺にはマリアの泉と呼ばれる巡礼地が多く、フリートリット、シェンブロン、ラグヌン、タールキルヘ等々がある。霊泉の発見は奇蹟の一つに数えられており、ケルト族やゲルマン人によって知られていた泉は、のちにマリアの名で崇められている。かつての泉のデーモン、ニュンフェ、水の精は聖ラマクルスに追い出され、キリスト教の聖ヴァルプルガ (Walburgis) ヘドウィッヒ (Hedwig) の名がつけられ、大抵は聖母マリアの名となり、母を失った孤児はマリアが泉から乳を出して飲ませ、ヨハネと一しょに音楽を奏でて子供をあやすといういい伝えもある。ケルトやゲルマンの先行の大地母神的信仰を包含したキリスト教はマリアの名において泉の讃美を高めたのである。

マリアは恵みの泉、われらの聖き母

われらはひたすら祈る
マリアよ　天よりわれらを見そなわせ給え
聖なるマリアよ、心をこめておんみを歌わん！[22]

レッバッハの渓川ぞいの道を十字架や団体の旗を掲げて巡礼歌を歌いながら歩いてくる一行の人々に出会った。カメラを向けると恥しそうに笑った。いかにも純朴な田舎の若者たちである。現在ヨーロッパには宗教のリバイバル運動があり、巡礼もその一つでなかなかさかんである。なぜ巡礼するのかと若者にたずねると、「自分が生きている意味を確認したい」、「日常生活の信仰をもっと活力あるものに更新させたい」などとはっきりといっていた。

六　月

六月（Juni）の名はローマの女神ジュノー（Juno）にもとづいて名付けられた。古くはブラハモナート（Brachmonat）という。三圃式耕作地の「掘り返しする月」という意味であり、同時に干し草を刈り取る月であり、「薔薇の月」（Rosenmonat）ともいう。これらの名は民間の一般名ではなく、文学的な名である。太陽は蟹座にはいる。六月二十四日の夏至にあたり、ヨハネの火祭がある。六月が乾燥して日がよく照れば、収穫には恵まれるという。

聖体拝受の祭

聖体拝受、又は「フロンライヒナーム」（Fronleichnahm）は六月の緑の中に煌めくような祭である。緑の牧草地や野原に野芥子や矢車草、マーガレットが咲き乱れ、麦は黄に熟し、六月の空は青く澄んでいる。シュヴァルツヴ

アルトのザンクト・ペーターの高原の村ではこの祭の準備で少女たちは花を摘んで花環を作り、少年たちは聖歌の練習に余念がない。この聖体拝受の祭は聖霊降臨祭（Pfingsten）のあと第一日曜の木曜日におこなわれる。移動祝日であるので一定しないけれど、大体六月中旬になるようである。

フロンライヒナームのフロンの原型フロ（Frô）は中高ドイツ語で「主」（Herr）の意であり、「ライヒナーム」の原型「リヒナーム」（Lichnam）は身体（Leib）で、ラテン語では「Corpus Christi」（キリストの身体）すなわち「聖体」という意味である。受難に向う最後の晩餐のとき、キリストは弟子たちと食事をともにし、パンを割いて弟子たちに与えて食べさせ、ワインをそれぞれに飲ませ、これをわが肉とせよ、わが血は世の罪の贖いとして流す血であるといって新しい契約とした。キリストの愛の道は、化体のワインとパンに象徴され、秘跡（サクラメント）としてキリストの共同体に生きつづける。人間は飢え渇きを感じ、パンとワインを必要とするようにキリストをたえず必要とする。キリストを生命の糧（パン）と呼び、キリストはわれらのパンとして「ホスティエ」（Hostie, 聖餅）が崇められてきた。キリストの宴に招かれた喜び、キリストの献身の愛にたいする感謝を表わしたものが聖体拝受の祭である。

伝説によれば一二四六年リュティッヒの尼僧院のユリアナ聖女は月の中に裂け目を見た。これはキリストの聖体への感謝のミサを行うことによってのみ消えるという黙示を得、僧院の中でひそかに行っていた。クリスマス、復活祭その他多くの祭はあるが、聖体を捧げたキリストそのものへの感謝の祭がなければならぬという純粋に敬虔な想いは広く受け容れられるところとなり、一二六四年法王ウルバン四世は全教会の祭壇においてサクラメントを記念として行うよう制定し、トマス・アクィナスがこのミサの典礼を定めた。この祭の主要な基礎になっているものは、神の愛の宴にすべての者を招くということである。ルカ福音書に宴に人々を招くとき、友人、兄弟、親族、金

持の隣人を呼ばず、「貧しき者、不具者、足なえ、盲人を招きなさい」（一四ノ一三、二一）といい、「道や垣根にまで出てゆき、家に満ち溢れるまで人々を強いて連れ来れ」（同二三）「招かるる人は多かれど、わが晩餐にあずかる者は少なし」（同二四）とあるように、この神の祝宴に大勢の人々が参加するようになってゆき、やがてモンストランツ（Monstranz）を中心に盛大な行列の行進が行われるに至った。

ザンクト・ペーターの聖体拝受には素朴な昔の面影をとどめる行列や儀式があり、祭の日には各地から観に来る人々で賑わう。この素朴な村では前年の秋か、今年の春、各家庭に配った花の種子（たね）を花壇や畠に蒔いて育てたものを教会や家庭に飾る。前日から教会の広い床（ゆか）や前庭に花と木の実のモザイクで若い女教師が少女たちを指導して作っている。いよいよ今朝完成し、新鮮であるように霧をかける。今日は村の人々は総出で盛装して鐘とともに教会に集ってくる。ミサが終ると、いよいよ待望の聖体拝受のお練りがはじまる。先頭にはこの教会の守護聖者ペテロの名を刺繍した旗、白地に十字をそめた旗を老人が掲げてすすむ。そのあとに十二人程純白のドレスに頭に花環を飾る少女たちが手に籠を持ち、かわるがわる花をふり撒いてゆき、白いガウンの聖歌隊が歌ってゆく。やがて福音書を手にした副司祭、リンリンと鈴を鳴らす若い助祭が来る。白いガウンの少年侍者は吊り香炉をゆるやかに振り、香煙を曳いてゆく。このあとに金銀の刺繍の天蓋ととばりにかこまれて鏡のように光輝を放つモンストランツ（顕示台ともいう）を司祭が奉持してゆく。モンストランツは太陽のごとく光り輝く形をしていて教会で最も大切なものとして扱われている。キリストの愛の象徴ともとれよう。普段は聖所に秘蔵しておき、大きな祭でなければ出すことはない。まして教会を出て行列の中で見せることはこの聖体拝受のとき以外にはない。場所によってはモンストランツの代りに、サクラメントのパンあるいは聖餅（ホスティエ）を台に載せてゆくところもある。モンストランツの制定を定めたのはトマス・アクィナスである。このあとに聖職者、村長、村会のメンバ

ー、教区の代表者、婦人団体、病院の医師、看護婦、消防隊、青年団、ツンフト等々の各種団体がつづき、揃いのユニホームの音楽隊が前方の聖歌隊とかわるがわるに演奏する。シュバルツヴァルト特有のシェッペルを髪に飾る娘たち、ヴェールを被むる婦人たちの民族衣裳はとりどりに華やかである。黒い式服の母親に手を引かれてゆく子供たち、老人たちもおくれまいとついてゆく。最後は青年や教会の役員たちである。

これにたいし沿道で迎える人々や家々もまた聖体拝受の日には華やいでいる。公共機関の窓や店によっては黄と白に染めた旗を窓から長く垂らし、あるいはポールに旗を立てている。各家庭の祭壇をバルコニーや庭先に出してとりどりの花を飾り白樺や樅の緑の枝を窓ぎわに立てる。家の入口に立て聖画像を青い羊歯や布地の上にたて花瓶に花を挿しているところもある。乳香、没薬を焚き、女性たちは庭につなを張り、これに金糸銀糸の縫い取りをした一番よいヴェールやショールをひろげて聖体の祝福を受けようとする。また燭台を並べて迎える家もある。緑光のカスタニアのもとゆらめく蠟燭の中を行列はリリリン、リリリンと鈴や鐘を鳴らし通りすぎてゆく。静かな歩みの中で聖歌隊の歌が野原を流れてゆく。

讃美されよ神よ
主は血潮と肉をわれらに与え給えり
主よ　あわれみ給え（キリエ　エレイゾン）
御母マリアより生れ
人と成りし主は
すべての苦しみよりわれらを贖い給えり

主よ、あわれみ給え（キリエ　エレイゾン）

これにたいし後のコーラス隊もつぎのように歌う。

夏の野山はあたたかくなごみ
緑の草かぎりも知らず
いく度も秘蹟は讃えられん
森は茂り合ひて暗く
樹々はかぎりなし
いく度も秘蹟は讃えられてあれ
太陽は青空に澄みて清らに
ふりそそぐ光かぎりも知らず
いく度も秘蹟は讃えられてあれ

聖体の行列は主要な街並をゆくだけではなく、住民の住むところは村はずれでも出掛け、さらに畑地や牧草地、森林にまでゆく。ところどころに聖母の御堂や道しるべがあるとそこにも立止って讃歌を捧げ、花を撒く。牧場では牛たちが鳴きながら祝福を与える司祭の方に近づいてくる。草を与える子供もいる。農作物への祝福も行う。また新しく開墾した畠があればそこへもゆくし、病院や施設にも赴く。今年雨が降り過ぎぬよう、旱魃や落雷、雹の

害がないように、火事、害虫が発生せぬよう、人間や家畜に病気がないように祈る。また嫉妬や憎悪が生じないように、薬草がよく育つように祈る。この御聖体の祭は成育生長のためであるから、赤児や小さな子供を持った家ではつとめて祝福をうけるように参加する。

人口五、六万以上の都市ではこの行列の行進が通過する午前中は交通は完全にストップし、城跡や公園から古い臼砲や射撃隊の祝砲を打つ。お練りがすむと男たちはレストランやワインシュトーベでシャンパンやワインで祝杯をあげ、女性はこの日のためのケーキやパン菓子をつくるのに忙しい。村全体、町全体が華やいで和やかな気持につつまれる。再び教会に御聖体が戻ると、参加した少女や娘たちは、家族や知人にかこまれて一緒に記念撮影をし、花を手にして家路につく。バイエルン地方では女性は民族特有の編髪をし、祝福をもたらす花飾りを髪に飾り、白い衣裳で華やかに行列をする。

この聖体拝愛の行事はカトリック教徒にとって華麗なミサ体験となるわけであるが、この季節の農耕牧畜における悪い虫や病気を村から追い払う行事の上に重なっている。村落の畑や牧草地を行列して歩き廻り、境界を確め、耕作の祝福を祈願するゲルマンの習俗「村見廻りの行列」(Flurumgang)であり、馬を列ねてゆくのを騎馬行列(Flurumritt)と呼んでいる。この聖体拝受が民俗生活の中に融け込んで夏の最大の祭となったのは、たんに教会だけでなく、各種の団体の団結や融和のために参加し、全体として王朝的なゲマインシャフト全体の表現をとるようになっていったからである。バイエルン州などではモンストランツや福音書、サクラメントが捧持されるだけでなく、聖母像、マグダレーナ、カタリーナその他の聖像を台座に乗せて若い娘たちがかついでゆくところもある。行列の人々も迎える観衆者も六月の自然の中でそれぞれ華麗な演劇を演ずるのである。

昔はこの聖体拝受は現在よりもっと華やかで凝ったものであったことを伝えている。聖像をかついでゆくよりも、

聖書に基づいてさまざまの扮装をして行列に加わった。アダム、エバがまず現われ、ヨセフと三人の兄弟、モーセとアロン、ダビデとゴリアテ、聖ゲオルクは絹の縄で竜をしばってマルガレーテと一緒に歩いてゆき、イエス誕生の三王礼拝、羊飼の子供たちのグループも加わる。ヤコブ兄弟会が巡礼姿のヤコブのように棒や旗を持って並び、マグダレーナやバルバラに扮する娘なども混って延々と行列がつづいていった。各都市ではその華やかさを競い、ウィーンでは九十三組の参加グループのほかに、五十組ものツンフトが旗や飾り物を担いでゆき、市をあげての賑やかな祭を行ったと伝える。時の流れもゆったりとした長閑かな良き時代であったのかもしれない。とに角聖体拝受の祭は、すべての聖書に記された出来事がサクラメントの中に成就してゆくことを楽しく表現している。森の樹立や草の緑に包まれ、薔薇が薫りを放ち、まことによき季節にふさわしい祭である。アヴィラの聖テレジアは瞑想の中でつぎのように語っている。

主よ、おんみを愛する者は
まことに王者の如くその道をゆく

聖体拝受の行列の歩みがゆったりと静かで堂々としているのは、神への希望と信頼の歩みだからである。

信仰と信頼に生きるとき
主は光を示し給う
われらとわにおんみを仰ぎ見ん

聖歌隊は歌ってゆく。六月の空は青く澄みミニァチュールの金粉が世界をやわらかく包んでいるかのようである。

聖アンナの日

バーデン州の大学都市、フライブルクから二十キロ南に向ったところにシュタウフェン（Staufen）という町がある。シュタウフェンといえば、中世一四八〇年クニットリンゲン（Knittlingen）に生れたドクトル・ファウストがここで悪魔を駆使して錬金術を試み、自然研究に没頭したところとして有名である。ファウストといえば半ば伝説化されているが、歴とした実在の人物である。彼に関する伝説はシュタウフェンだけでなく、各地にも遺っているが、とくにこのシュタウフェンには古いレストランがあり現在もそのまま残っている「獅子」（Löwen）には、彼が実験した部屋まで現在保存されており、とくにフライブルク大学には彼に関する記録資料が大切に所蔵されている。有名なゲーテのファウストの方がむしろフィクションやイマジネーションによって修飾されているのであるが、ゲーテの人間的魅力、文学的力倆によって重きをなしている。南シュバルツヴァルトのミュンスターターールから源を発するノイマーゲンの渓流が町に沿って流れ、カスタニヤの亭々たる老木が並木をなして両岸から流れをおおうように茂っている。いつもはまことに閑静な古い町で広い公園をファウストとメフィストが睦じく語り合って歩いているような錯覚におちいる位である。町の北部には養魚池が多く、南部にはシュタウフェンの古城の趾が山にのこっている。平野は麦畑であり、丘陵地帯は葡萄畑である。ここはこの地方のリゾート地でもある。

この閑静な町もこの七月二十六日は町の守護聖者聖アンナの祭の日で、街並は黄と橙色の旗を垂らし、バルコニーや家の入口には大きな青い羊歯を敷き、とりどりの花を飾り、白樺や樅の若枝を挿している。すでに前夜のうちに聖マルティン教会の聖アンナ像が町の広場の祭壇に高くまつられている。祭壇のまわりにはダリア、グラジオラ

ス、百合、ひまわりなどとりどりの季節の花が供えられている。聖アンナは今日は一年中で一番敬まわれ、祭の中心として話題の存在となっている。今日のミサの祝福にあずかろうと近郷近在の人々、とくにお年寄りたちが祭壇の前につめかけている。

司祭、助祭たちの登場とともに、聖アンナの徳を讃え、キリストやマリアへの讃美のミサが済むと、十字の旗を掲げる少年たちを先頭に、七、八歳位の白いドレスの少女たちが花籠から花をふりまいてゆく。若い女性たちがとりどりの旗をかざし、コーラス隊のコーラスが全体の行進をひきしめる、あとにボーイスカウトがつづき、町の大人たちのさまざまの音楽隊が隊伍をととのえ、消防隊、病院関係の人々、アンナの守護にあずかる洋裁、衣服製造業者などの団体、幼稚園の子供たちの行列、そして天蓋の中にはモンストランツ（顕示台）を司祭が捧持してゆっくり歩む。つぎに聖アンナ像を若い女性たちがかついでゆく。町長、町会議員、教区の聖職者、一般の信徒、幾組かの婦人団体がしんがりを務める。このアンナの行列は町の通りをお練りをしてゆき、家の戸口に立つ人々はまき散らす花をつけ、ふりまく香炉の薫りを浴びる。

聖アンナは聖母マリアの母であり、イエスの祖母にあたる。ビザンチンの東方教会ではすでに五五〇年頃にはアンナ崇拝が行われていたといわれているが、ヨーロッパでは一五五八年頃、全教会で祭を行うようになった。とくに後期ゴチック彫刻や絵画では「聖家族」という主題が好んで作られた。祖父ヨアキム、祖母アンナにヨセフとマリア、キリストを混えて団欒している姿は、家庭生活の模範として広く民衆に愛好され、家毎にも飾るようになった。レオナルド・ダ・ビンチに有名な聖家族の画がのこっている。この六月二十六日はカトリックでは聖ヨアキム、聖アンナの祭の日となっている。

とくに聖アンナが左右の膝に二人の子供、娘のマリアとそのマリアの子のキリストを乗せているようなテーマの

彫刻を「アンナゼルプドリット」(Annaselbdritt) と呼ぶ。じつはこのシュタウフェンの聖アンナは、正確にはこの「ゼルプドリット」像である。メシアの生れるべき待望のダビデの家系の聖アンナと聖ヨアキムは年老いてのち(恰もアブラハムとその妻サラと同じように) 敬虔な祈りの中でマリアが授けられた。聖母とキリストの祖となったアンナは、広く母性を守る偉大な守護者であり、救いの生命の樹の根ともいうべき存在として崇拝された。たとえていうならばアンナは樹の根、幹、枝であり、マリアは花、キリストは実となる。それゆえアンナは子を産み養い育てる一切の母性の根源的存在である。妊婦の出産の守護、子宝に恵まれぬ女性や寡婦となった者を助ける者、未婚の若い娘を悪や災いから守り、良き伴侶を授ける存在であり、とくに幼児を守り、病気に苦しみ悩む者を慈しみ庇護する大母としてその治療看護の奉仕をなす人々の守護聖者となった。聖アンナと名づける病院、看護学校、社会奉仕の婦人団体は数知れぬほどである。「アンナ」はヘブライ語で「恵み」「愛」「祈り」を意味している。

聖アンナの行列のお練りが済むと、待ちかねたように別の祭のパーティの広場から華やかにブラスバンドやギターバンドの音楽が流れ、若者たちはダンスに夢中になり、丘の上から花火が威勢よくあがる。さまざまな食物屋やみやげ屋で家族がにぎわっている。今日の祭の主役のアンナ像は、この町の出身の彫刻家シクスト (Sixt) の作品である。彼はフライブルクのミュンスターその他に後期ゴチックの聖像を伝えている。この作は一五一六年の作品で、菩提樹を彫材としている。アンナはマリアと幼児キリストをやさしく見守り、マリアは幼児に葡萄の実を与えている。神の言葉の成就、救いを表わすものであろう。アンナの被りものや衣服は当時の市民の老婦人の服装である。アンナの単独像もなくはないが、このゼルプドリット像が圧倒的に多いのは、ゴチックの人間性を親密に造型しようとする態度が広く民衆の支持を得たのであろう。町のまわりの丘陵は葡萄畑であり、そろそろ葡萄の実も熟れるのであろう。涯しなくつづく麦畠は銀の穂波が揺れて、今はとり入れを待つばかりである。暑い日射しと雲の

融け合う青い空とは、恰もアンナのやさしい眼ざしのようである。聖書資料から見れば、アンナやヨアキムは詳しく書かれているわけではない。しかし信仰のもつ情熱がキリストからマリアへ、さらにアンナへと発展してゆく。救いは聖家族の形をとらなければならなかったし、その根源の母性を求めてアンナ崇拝に至ったのは中世の人々の信仰のパトスによるものである。

水の精に関するゲルマンの伝承

ベックリン（A. Böcklin）はしばしば幻想的な画題としてドイツの伝説や伝承に出てくる水の精を画いている。有名なものは北海の寂しい岩島に遊び戯れる人魚や水の精たちがあり、ギリシャ神話に登場するパンの神、ケンタウロスなども好んで画いている。ポプラの樹立のほとりをゆっくり小川が流れてゆく。広々と牧草地が広がり、子供が花を摘んだり、駆け出している。衣服を脱いで水にはいろうとしている大人たちもここでは子供のようである。遠くに家々が見えるが、ここは仙境的な別世界であり、怪奇な水の精を直接ここに画いてはいないが、現れても不思議ではない雰囲気である。

水の精（又は水の精霊 Wassergeister）については地方により時代によりさまざまな姿をとっている。手は蛙のような水かきをもち、頭に蘆の葉を巻きつけ、大きさは大体三歳から十二歳位の人間の子供であるという。しかしこれに触れると氷のように冷く、髪が長く水藻が生えている。口は蛙のように大きく、耳は頭のうしろか頭のてっぺんに生え、眼はぎょろ眼（魚眼）をしており、首は後へもまわる。大抵下半身は魚で上半身しか見せない。その眼は青味か、赤味を帯び　心を刺すような魅力があり、女性はこれを見ると病気になるという。手足は馬や山羊のようであるとか、耳も馬や山羊のようであるとか表象はじつにさまざまである。いつも頭はフチナシ帽子のような

ものをかむっているようであり、水を離れないのでいつも身体は濡れているともいう。

この水の精は日本の水神、その一般化としての河童などにすこぶる似ているようである。その呼び名はさまざまでここに掲げておくと、(Wassermännlein, Mannl, Wasserteufel, Wassermannin, Wassermanfrau, Wasserfräulein, Meerfrau, Meerfräulein, Meerwinne, Wassernix) などであり、大体小人、異様なもの、男女の性による差を認めているようである。そのほかホウラート (Hourad) がある。これは「ホウ」と鳴くためであるという。バッハバルバラ (Bachbarbara) は水のバルバラと畏れて呼び、ニックス (Nykus, Nixssen) は文字通りギリシャ神話に由来する呼び名である。

この水の精の特徴は普通には人間の姿をとる小人であるが、必要に応じて巨人にもなるといい、何にでも変わる変化自在の能力を持っている。蛙、井守、蟇、鵞鳥、蛇、鼠、山椒魚、兎、犬(水に馴れた猟犬)、山羊、仔馬、石、樹木、牛(とくに白牛)、鹿、馬、人形、時計、球形のもの等々に変る。他方、いつも水の中にいるので人間の肉眼では見ることができないが、その皮膚は水のように青く、鼻の穴は大きく、犬のような頭をしているという説もある。滝の中に魚の姿をした精が棲み、蛇の姿をしたニッケルカッター (Nickelkatter) が水の中へ子供をひき込むというのは、水や川へのおそれを表わし、とくに子供への警告であろう。水の精たちは夫婦あり、子供あり、家族生活をいとなむ。人魚の子は海牛のように醜いが、人魚は天使のように自分の子を可愛いいと思っている。水の精は人間と結婚したがり、村の娘を誘惑、乃至は強制的に水に引き入れて結婚することもあり、六、七人子を産むと人間世界に帰してもらえるという。女性の水の精は歌や音楽で人間の若者を魅惑し、若さと美しさで抱擁し、水の深みへ引き入れ、七日後に屍が浮ぶ。そのとき手に睡蓮を持って浮んでいるという。女性の水の精は川岸や岩の上に坐り、輝く金の馬櫛で髪をとかす。若者を魅了し、難破させる話はローレライの伝説だけに限るものではな

い。またアンデルセンの人魚姫のメルヘンの生れる精神的風土もこの民俗的な土壌にある。

水の精は自分の子供を人間の子供と取り換えようとする。水の精の子は醜く仔牛のような眼をし、鴉のように鳴く。産婦は水の精にわが子を奪られないように、ゆりかごの子供の上に歌の本をのせて置かなければならない。とくに水の精が死産したとき、人間の産室のあたりへうろつく。とくに洗礼を受けない六週間の間が危険であるという。出産時の慎みや戒めとして語られることが多い。反対に水の精は人間の子供や家畜を恵んでくれるとか、人魚がやって来て出産の手伝いをしてくれるという民話もある。以上不十分ながらゲルマンの水の精の特質をあげてみると、かつては水を司る神々が、精霊として崇められ畏れられてゆく過程が分る。他方異質の自然の精霊にたいする畏れとは反対にある一定の関係では恵みを施す存在でもあることを伝説は示している。一定の関係とは人間がこれにたいして慎みや戒めを遵守する範囲においてである。

泉崇拝とその習俗

ヨーロッパの都市や村落の中心となる広場にはかならずといってよいほどブルンネン（泉、噴泉 Brunnen）がある。広場は教会やラートハウス（市町村役場）であり、そこには聖母マリア、守護聖者、民間伝説やギリシャやラテンの神話などにもとづく彫像がある。住民は日に煌いて溢れ出る泉に自分たちの生活の源泉を見て、限りない喜びと安定感を感じたにちがいない。事実、ブルンネンは彼らの生命の象徴であった。ここに泉在りということは、ここに生きるところ在りの意味である。原始時代から人間はよき水の湧き出るところを探し求め、そこに集落や町を形成していった。飲料の水は人間に不可欠であり、掘鑿技術の稚拙な時代には河川の源や自然の湧水は神聖視された。それだけでなく大地から湧き出る泉は病気を癒す能力があると信じ、鉱泉を飲む風習も多い。やがて井戸を

掘る方法も発達し、今日のように水道方式になると古代や中世のブルンネンのようなものだけでなく、噴き上げるシュプリンゲン・ブルンネンいわゆる噴水である。今日ではさまざまのブルンネン工芸（クンスト）として発達していて多種多様な形態を見ることができる。これらは広場や公園で人間を愉しませ芸術的なものとなっていて、かつてのようにそこで水を汲み、野菜を洗い、洗濯をするといった共同体の井戸の性格はうすれているかもしれない。

しかし古代ゲルマン信仰の名残りは今も山村や辺鄙なところに残っており、現代人の精神の深層にも生きている。晴れていた山や森の水源のあたりが俄かに霧がわき、雲となり、夕立や雷雨となることがある。昔の人々は泉の精が霧や、雨を呼んでいるのだといった。湧出する泉は暗い大地の下の冥界とこの世界を結びつける存在、その出入りの接点と考えられ、神聖なる場となった。泉にたいする掟や戒めが沢山ある。その一、二を挙げると、夜十二時頃になると、泉のもとに泉の精霊、デーモンが現われる。ハッケンマン（Hackenmann）と呼ぶ水の魔は子供をさらうということは、夜遅くなって泉に近付くことの危険と子供がいたずらをしたり、瀆したりすることへの警告であろう。聖なるクリスマスの夜に泉をのぞいてはならぬ。のぞくとうしろから水の精に頭を叩かれる。暗い地下へと引きずり込まれる。泉に向って唾などを吐いてはならぬ。石や木を投げてはならぬ。泉には神の顔がつねに映っているからだともいう。ところがこれと反対にクリスマスや大晦日の十二時に燃えているたいまつを泉に投げ込む習俗もある。この場合デーモンやヘクセが泉に悪いことをしないための予防、制圧の行為となる。昔は冬至、夏至、日蝕、月蝕には泉を布でおおい、悪竜が吐く毒気にかからぬように防いだ。生活の源泉である泉を瀆さぬために人間は必死であった。人間の胃腸や眼病、婦人病に効く泉があり、良質の飲料の泉は人間の寿命にも関わる反面、悪い水質の泉は人間の健康を害し、家畜を多量に死なせることもあり、神経をつかうのは当然である。泉は人間の生命を養い育て浄める働きをもっているので、大体世界的にみて神性は女性の姿をとることが多い。水の精もウンデ

ィーヌ（オンディーヌ Undine）などのやさしいニュンフェの姿で表わしている。

冬の間凍りついていた泉が融けはじめ、流れはじめる頃、早くも泉を祀る行事がある。やはり復活祭の頃に泉のきよめ祭が多く、泉が流れを止める秋の終りまで行われる。春の祭では冬の間溜っていた落葉や塵埃をかき出したり、水垢を取ったり、清掃し、最後に塩をふりまいてきよめる。つぎに掲げる碑の言葉はフライブルク郊外のゼルデンの農家の入口に立っていた。石灰岩の表裏二面に刻んであるものである。

人間の魂、それは水にたとえられる
人間の運命、それは風にたとえられる

人間の魂は天から下り、天に昇って
永遠の交代をなす水にたとえられる

洗礼者（バプテスマ）のヨハネ祭

洗礼者ヨハネの祭は六月二十四日であり、丁度夏至にあたる。ゲルマンやスカンジナビアの人々は太陽が勝利の最高点に達するときであり、この大地にもたらす祝福がもっとも多いときであると信じ、多くの行事がおこなわれた。村人たちは各自藁束を持ちよって、広場や山の上などで火をつけ、そのまわりで歌ったり、踊ったり、ときには火の上を跳びはねたり、火の輪をくぐったりする。若者たちにとって歓びの火で、愛し合う者同士は「火の中をくぐりぬけ」て踊る。その折に薬草や花、杜松（Wacholder）を投げ入れる。煙が大きくなればなるほど、畠や

牧草地、家畜に祝福が大いと信ぜられた。この祭の日は「ヨハネの宴」(Jahannestrunk) ともいって仕事を休み、家の前にテーブルや椅子を出し、近隣の人々と歓をつくし、「ミンネの宴」(Minnetrunk) をする。夜が更けるまでつづく。シュヴァーベンのボーデン湖のスイスの彼方では山の上でヨハネの火を燃しているのがいくつも夜空に見える。これを見て人々は夏が来た。夏至の祭だと感慨にふけるのである。

このヨハネの夏至の頃は、ヴァルプルギスの夜と同様さまざまのデーモンが動き出し、勝手に暴れ廻ろうとする時期であると民間では考えられていて、魔女が悪さをしたがり、妖精 (Elf, Alp) や小妖精 (Heinzel, Männchen) があちこちをうろつく。ところがかならずしも悪いデーモンばかりでなく、人間に好意を持つ小妖精が地下の宝の在り家を教えてくれることもある。薬草はこの日から薬の力をつけるといい、ヨハネが荒野で身を養っていたという「マクルーベ」(Makrube) を野山に採りにゆく。この日の沐浴はとくに健康に良いとか、この夜草葉から集めた露を飲むと病気に効くという。ペトラルカは一三三〇年このヨハネの祭の夜、ケルンのあたりのライン河で女性たちが沐浴しているのを見たと記録にのこしている。他方ヨハネの日に沐浴するのは危険であるといって禁止しているところもある。とくに特定の池や川では人間の犠牲を求めるので、この日に花やパンを供御として水に投げ入れる。シュヴァーベンの各地では花束を水に投げ、「天使よ守れ、デーモンよ出でゆけ、わが主なる神よ、溺れたり怪我をせぬよう、花束を捧げます!」と唱え詞をいって水浴びしなければならない。古くからの諺によれば、ヨハネの日には「突如として溺れ、焼け、ころげることがある」から気を付けなければならない。このヨハネの日を転換点として完全な夏型の生活にはいる。ヨーロッパもこの前頃から雨季とはいわないまでも長雨がはじまり、湿気も多くなる。だからヨハネの日は雨をもたらす始めともいい、これを「ヨハネの洗礼」(Jahnnes tauft) ともいう。

このヨハネの火祭には沢山の詩や唱え詞がある。つぎはヨハネス・タイシンク (Johannes Theissing) の代表的

な詩の一つである。

ヨハネよ　ヨハネよ、夏至の火を燃やせ！
眠っていたさまざまの精霊が
高いところ、深いところからやって来る、
山からはコーボルデ（Kobolde）が、
地下からはウンホルデ（Unholde）が、
青い湖や沼からは水の妖精（Nixen）が、
巨人は万年雪から
祖霊は古い城から
魔女は蒼ざめた馬に乗ってやって来る
聖ヨハネよ、聖ヨハネよ
夏至の火を点せ！

ヨハネよ、ヨハネよ
夏至の火を燃え上らせよ、
いろいろな場所に居据っている
デーモンを追い出せ、

家の中に潜び込まぬうちに
わたしたちを威嚇するもの
デーモンを皆追い出してしまえ、
ヨハネよ　その火を燃え上らせよ、
何故ならあなたのしるしの前には
すべては消滅しなければならぬから、
ヨハネよ、ヨハネよ　夏至の火を燃え上らせよ、

ヨハネよ、ヨハネよ、夏至の火をしずまらせよ、
花嫁を花婿のもとへ導きゆけよ、
迷える群を復活祭の小羊のもとにつれてゆけ、
たれが花嫁を見つけ出すか、
この今わたしたちに告知せよ、
火の上を上手に跳ぶ者は
一年以内に目出度かろう、
あまり上手に跳べない者は
年が寄ったかまだ幼いからだ、
ヨハネよ、ヨハネよ　夏至の火をしずかに燃やせ！[23]

この詩は火祭の踊りに夜の更けるのも忘れている村の若い男女の姿が火影の中に浮び上る。この祭はバプテスマのヨハネであるが、民間習俗では福音書の若きヨハネとも同一視され、恋の守護聖者として歌われている。

バプテスマのヨハネは祭司ザカリヤとエリザベツの子で、ユダの荒野で予言し、イスラエルの人々に悔い改めを説き、ヨルダン川で洗礼を授けた。キリストをも洗礼したという。ヘロデ・アンティパスのとき、捕えられ、三十歳で死海のマケルスで死んだと伝える。キリスト教ではキリストの先駆者として重んじ、この六月二十四日を彼の誕生日として祝う。誕生日を祝う唯一の聖者である。キリストの先駆者としてのヨハネは恰も太陽の昇る前の曙光になぞらえられ、キリストの光を証しする存在として来るべきキリストを待望するには、この夏至の日が適わしいと考える。キリスト教の暦ではキリスト誕生を中心にした季節と、ヨハネ誕生を中心にした季節と二大別が可能である。前者は冬から夏、闇から光への方向であり、後者は夏から冬へ、光を予知する成熟衰退の生活態である。この二つですべてが動いてゆく。夏至そのものはたしかにゲルマンや北欧だけでなく、世界的な広がりを持つ祭や習俗である。しかしキリスト教はこの火の祭が神の祝福として浄めが行われねばならぬとしているところに意味深いものとなっている。自然の生成の向うところ、耕作物、家畜の生長の最高点において太陽の光と熱の祝福を身につけようとするアナロギーは、夏におけるデーモン的な存在の災いを防止すること、病気の制圧、潔めの意味も持つ。この火を浴びると癲癇性の病気によいという古い習俗もあったらしく、またこの火祭の灰を畑地に村の若者がまき散らした。もえ残りの木株は雷火を防ぐといって大切にされた。薬草のオトギリソウ（Jahanniskraut）や、ジャムにするヨハネスベーレ（Jahannesbeere）はこの聖者と結びついた植物である。ヨハネの祭の火にちなむ諺、格言詩も多く、つぎもその一つである。

焔が燃え上るとき、つぎのことを考えなさい
人間は永遠の火の中に根を下ろし
己れが由来した永遠の光に至らなければならぬことを

七　月

七月はローマ人の暦では「五月」(Quintilis) にあたる。キリスト紀元前四五年ユリウス・カエサル誕生を讃えてこの月を「ユリウスの月」とした。ドイツではカール大帝が「干し草の月」(Heumond) と名づけた。太陽は獅子座にはいる。この七月が晴れた日が多ければ、収穫は良いといわれる。この月は雷雨が多いので、花火を揚げたり、魔除けの鐘を鳴らす風習のところもある。

シリウス星と犬の日

七月二十四日、シリウス座（おおいぬ座、天狼星）が明け方から昇ってくる。全天中もっとも輝きの鋭い星で肉眼でも七色の光を放ってまたたく。メソポタミヤでも中国でも夜光る犬や狼の眼にたとえて似たような名を持つに至った。エジプトではナイル河の氾濫が起る時季であり、太陽の昇る直前にその上に現われてよく輝くので、これによって太陽の一年間の軌道が分り、エジプトにおいて太陽暦が発見される。しかしそれを知らせたのはこのシリウスであるのでシリウス暦とも呼んでいる。このシリウス星が現われる頃、丁度盛夏となり、灼けつく暑さのため人間の体力が弱り、家畜も病気になりがちで、疫病の発生も夏が一番多い。このためにエーゲ海のケオス (Keos, Kea) 島では劔の舞いをしてこのシリウスの鋭くギラギラ輝く光をさえぎり、はらおうとした。それゆえある地域

ではシリウスは悪い星と考えられるようになった。ヨーロッパでも七月二十四日から八月二十四日を「犬の日」(Hundstage, Dogdays) と呼び、さまざまな病気を惹き起すのはこの星のせいと考えた。しかし夏における体力の消耗、諸種の病気を防ぐための慎みの期間として経験上次第に定まっていったものではないかと推定される。特殊な信仰形態として期待される豊饒のために犬をいけにえとしてこの星に捧げたこともあったらしい。この場合一匹の犬のいけにえでその星の悪力を払う習俗もあったと考える人もある。

この「犬の日」の間は家庭内でのさまざまの慎みがあり、過度の体力の消耗を戒め、刺絡法も避けた方が良いとされた。

八月の聖母昇天祭と薬草の潔め

ローマ人の場合は六月 (Sextilis) に当る。皇帝アウグストスの生れた月を祝ってアウグストと呼ぶようになった。この月に大抵戦争で勝つことが多かったためともいう。ドイツの呼び名は「収穫の月」(Arammânoth, Ernte-monat) で、農作物が実る。「暑い月」(Hizemonat) ともいう。この月に太陽は乙女座にはいる。本来ローマでは八月十三日は女神ディアナの祭があり、のちにキリスト教で十五日のマリア昇天祭をもってこれに代えたのである。この季節は村や町で各地の巡礼がさかんにおこなわれる。

八月十五日のマリア昇天祭はかつては広くおこなわれていたが、今日ではバイエルン地方、シュヴァーベン地方、ライン中流の地域、アルプス地方、オーストリアなどで催されている。マリアはこの日昇天し、神のもとで神の子の母のつとめを果した戴冠の栄光を受ける。伝説によれば昇天三日後に埋葬した墓所を開けると、マリアの亡きがらはすでになく、美しい花と芳香を放つ薬草のみがそこにあったといわれる。この伝説に基づいて多くの危険や病

気から人間を守る薬草の潔めを行うためにこの日教会に赴くことが慣わしとなった。

ヨーロッパには薬草となる植物が七十二種類とも七十七種類ともいわれているが、沢山あるという意味であろう。この昇天の日にその中から九種類を選んで教会に持ってゆく。古くからのしきたりでその日の日の出前にナイフや鋏などを用いずに手で折ったり、根ごと採ってきて束にする。この九種類は三の三乗で、その種類は地方、地域によって異り一定していない。一例をあげるとタチジャコウソウ（Tymian）、カミッレ（Kamille）、ヨモギ（Beifuß）、シマセンブリ（Tausendgüldenkraut）、ノコギリソウ（Schafgarbe）、オオバコ（Wegrich）、アルニカ（Arnika）、ロスマリン（Rosmarin）、ニガヨモギ（Wermut）、オオグルマ（Imula Britanica）、ヤマカノコソウ（Speik）そのほか芳香を放つ花や草などを束にする。この場合かならず黄色い花の「王者の燭火」（Königskerze）と呼ばれるビロウドモウズイカ、あるいは小型のひまわりのようなオオグルマを中心にして束ねなければならない。その他庭や薬草園にある香料や辛味のある草木の花や実、その他ハシバミ、ナナカマド、ニワトコ、リンボク、カリンなどの枝も折って束にする。この場合ナデシコ、セキチク（Nelke）を添えるところもある。庭に咲かせたグラジオラス、ダリア、アスターなど季節の花も携えることも多い。ナデシコ、セキチクの赤系統の花は夕立で落雷の危険を防ぐといわれ、これを部屋や家畜小屋に投げる習俗がある。薬用や民間習俗の雷よけからはじまって求愛や結婚、祝いに欠かせぬ花となってゆく過程は十分たどることができる。これらの薬草の束を教会に持参し、祭壇に供えて司祭に潔めてもらう。場所によっては、特別にフランチェスコ派修道院、カプチン派の修道院などに効き目があるといってわざわざ持ってゆくところもある。潔めてもらったあとでその家の主婦か長女が持ち帰り、部屋や祭壇に飾り、畜舎の入口にも災厄除けに吊しておく。

現代では病気や怪我をすると直ちに病院に赴いて診察を受け手当をしてもらうし、医療機能は発達しており、薬

も医師や薬局から手に入れることができる。しかし古代、中世、近世いずれも病気にたいして人間は家庭ごとに自分で防衛しなければならなかった。どの草が何に効くか、どのような方法で飲むか、薬として飲むためにはどんな状態にして備えておくべきかは知っていなければならなかった。とくにこの八月十五日の昇天祭から九月八日のマリア誕生の日（少女の日）を経て九月十三日乃至十五日頃までを「マリアの三十日」（Frauendreißiger）と呼んでいる。九月十二日は「マリア命名の日」といいこの日に洗礼を受ける少女が多い。九月十五日はマリアの七つの苦難の祭である。この日を三十日の終りとはっきり見る傾向もある。

薬草は手近には庭や家の周囲に植えることもあるが、やはり森や山、牧草地にいって採集するのが原則である。この期間をそのように呼ぶのは、夏の絶頂を過ぎ、やがて太陽の日射しもものうくなり、植物の成分も濃厚になる。この期間に薬として効目も強くなることを人間は長い経験によって知ることができた。かくしてこの薬草の成熟期を「マリアの三十日」と呼ぶようになっていったのである。この期間のいずれかの日に共同で薬草採りの作業が村落で行われた。またアルプス地方など特殊の地方では特殊な薬草採集をしてこれを製薬会社や薬種業に原料としておろすところもある。どの薬草はどういう風に蔭干しするか、粉末にするか、根だけにするか、各家庭で知っていなければならず、とくに主婦の務めであった。ヨーロッパでは科学、医学を早く発達させたところであるから、発熱したらすぐアスピリンを飲み、風邪をひいたら風邪薬を飲むと思うのは早合点である。昔通りに薬草を煎じ、カミッレを沸した湯気を咽喉にあてて痛みをとる療法を頑強に守っている人もいる、薬局（Apotheke）とならんで本草学による薬種商（Drogerie）も多く、双方を兼ねた店もかなりある。

現在花を賞美する植物も元は薬用のために栽培していたことは、東洋も西洋も変らない。薔薇は本来その実を解熱剤にするためで、教会、修道院、城砦などで栽培した。今日でも十月頃になると赤熱した薔薇の実が列をなして

晩秋の日射しに輝やいているのも見事な美しさである。これが本来の姿である。珈琲、紅茶、カカオなどがヨーロッパの嗜好飲料となる以前、何を飲んでいたか。それは薔薇の実のハーゲブッテ（Hage Butte）とかカミッレ、あるいは菩提樹の実などである。いずれも薬用から転じて肉類、バター、チーズなどの食事のあとに飲んでいる。酸味が強く、飲んだあとさっぱり口を引き緊める作用がある。

収穫祭

このマリア昇天祭と同時にその年の収穫を祝い感謝する祭（Ernteaankfest）を行うところもある。収穫の祭はすでに六月頃から始まっており、たとえば苺などのようなものは収穫が早いのでその地方の収穫祭も早く行われる。

九月（Septmber）はローマ暦では七月にあたる。カール大帝は「収穫の月」（Herbstmanoth）または「第一の収穫の月」と呼び、十月を「第二の収穫の月」と呼んだ。収穫をみたす女神「フォラ」（Follâ）の月、又はフルマント（Fulmant）とも呼ぶ。バイエルンでは「ヒルグスト」（Hirgst）「内側に（はいる）」（Im einwörts）。太陽は馭車座に入る。この季節は元来ゲルマンでは死者の祀りが行われたが、教会の潔め、（教会に祀られている祖先の祭）が行われた。次第に十月に移行した。この月も八月と同じように巡礼が盛んに行われている。

十月（October）はローマ暦では八月に当る。カール大帝の頃はラテン語「ヴィンデミアエ」（Vindemiae）から「風の月」（Windunmanoth）と名付けたが、間もなく「ワインの月」」（Weinmonat）と改められた。第二収穫の月である。十月に太陽はさそり座に入る。ローマ時代十月十五日は収穫祭があった。とくにこの月に教会潔め（Kirchwein）が行われ、ミュンヘンでは十月祭（Oktoberfest）が有名である。十月は葡萄摘みとその祭がさかんである。十月が霜と風が多ければ翌年の一月、二月は温和であるという。このワインの月が暖かで晴れわたって

いると、厳しい冬があとにやって来ると天気占いはいう。十月は黄葉が山野をいろどる。葡萄や蔦の仲間には紅葉するものがあるが、概して濃淡の黄葉、茶褐色が多く、霧が立ちこめ、霜が降るようになる。

万聖節と万霊節

十一月一日は万聖節（Allerheiligen）である。すでに述べたように十一月は霧の月と呼ばれているように、霧がかかることが多い。遠くの森にかかっているだけでなく、庭をおおいつつんでものを見えなくすることもある。木の葉は大方落ちつくし、北風が吹いて寒々とした灰色の雲が迫り、文字通り冬の到来の間近を予感させる。渡鳥は南へ去ってしまい、鴨などが群れて鳴き騒ぐ。この節は八三五年ドイツにおける全殉教者のために行われたのがはじまりで教皇グレゴリオ四世によって全教会が聖者を偲ぶ記念の祭と定めたものである。この日に長くふくらんだシストリーツェル（Striezel）と呼ぶパンを焼くのが特徴であった。これを子供が地域の貧しい人々に施す慣わしがあり、代母、代父もその堅信礼の少年、少女に贈る。万聖節は殉教にたおれ、教えに献身した聖者、福者への感謝である。この日の夕方家族は揃って墓地に赴き、その墓に花や花環を供え、地方によってはその土地の花や果実をならべ、新しいきよめの水を一杯にし、常緑樹の枝を添えておく。翌日の万霊節（Allerseelen）のためである。次の万霊節の二日には黒服でもう一度墓を訪れ、雪におおわれる前に墓を飾り、永生のための小さな蠟燭をともす。この万霊節の蠟燭は赤いガラスの容器にいれてあり、家毎にともす小さな燭火が印象的である。死者のためにパンや穀物、生前の好物なども供える。都会で働いている若い人々もこの祭に村に帰ってきて教会や墓地を訪れる姿も一つの風景かもしれない。カスタニエンは古い枝を垂らして冬の姿をする。この日樅の木に少々斧をあててその木屑をとり、もしそれが湿っていればその年の冬は湿気の多い冬であり、乾いていれば、厳しい寒さの冬であるとい

われている。この日には「ゼーレンブロート」(Seelenbrot)「ゼーレンツオプフ」(Seelenzopf) といって丸い小さなパンを連ねたものやおさげ編みのようにつづったパンを作って供えるのもこの季節の風物である。

万霊節の蠟燭がしずかに燃えている
多くの傷をうけた人間の心とともに燃えている、
そして明るい幸福から苦難へと
一歩一歩いつも新たに不安な旅を歩む、

われわれがとどまるところは、夜と灰色ではない
手と手を取ってわれらは一つとなってゆく、
彼の救いの言葉はあの輝く祖国に
黄金の橋をたてようとしている
それは、わたしはよみがえりであり、いのちである
すべてをよみがえらせようという言葉である[24]

英国では万聖節 (Hallowmas) の前夜、十月三十日のこの夜をハローウィン (Halloween) と呼んでいる。本来ドルィードの秋の祭で、収穫を祝い、太陽神に感謝し、その年の収穫物を神に捧げてさまざまの御馳走を作り、饗宴をした楽しい祭であった。火を焚いて動物(鼠、土竜、狼等々)や魔女などの姿の藁人形を燃やした。ドルィー

ドの昔から、死神やさまざまの悪霊をこの夜呼び集める。あちこちうろつきまわる悪霊や魔女や害をもたらす動物がはしゃぎ騒ぐのを制圧するために、人間も火を焚き、騒音を立て、仮面、仮装してこれらのデーモンを駆逐したのがはじまりである。このことから大騒ぎする行事に変化していったのが、ハローウィンであるらしい。こうした先住文化とキリスト教の対置はドイツでは十二夜、燻し夜、その他ファスナハトなどの行事にも濃厚に痕跡をのこしている。やがて小雪が降りつづくようになり、鴉が群れをなして畠の落ち穂などをあさる。北海から寒さを避けてマント鷗がライン河に沢山渡って来、白い斑点をもつ鴉「ネーベルクレーエ」(Nebelkrähe) が姿を見せ、冬の到来を感じさせるようになり、聖マルチン祭がやって来るのである。

注(1) Der April weiß nicht, was er will. Der April bringt Regen, Schnee und Sonnenschein oft an einem Tag. Marlene Reidel; Die 12 Monate.

(2) April und Weiberwill ändern sich schnell und viel. Bringt der April viel Regen, so deutet der auf segen. Heller Mondschein im April, Gibt an Wein und Obst nicht viel. Ist's im April schön und rein, wird's im Mai desto wilder sein.; Volks Kalender für Schlesier.

(3) Je früher im April der Schlehdorn blüht, je eher der Bauer zur Ernte zieht; Schwabischer Bauernkalender.

(4) April und Mai machen fürs Jahr den Brei, Regnet's in die Ostern hinein, wird zur Wasser auch der Wein. Ist der April kalt und naß, dann Wächst das Gras. Wenn zu Sankt Georg (23) ein Rabe sich im Korn verbergen kann, deutet's ein Gutes Jahr an. Sankt Markus (25), Kornähren bringt muß. Gefriert's auf Sankt Vital (28), Gefriert's noch funfzehnmal; Lahrer Hinkenden Boten Neuer historischer Kalender für den Bürger und Landmann auf das Jahr 1982.

(5) Reinsberger Festjahr. Nork; Festkalender.

(6) P. Sartori; Sitte und Bräuch.

(7) ゾンメラッハにてステファン・ヌスライン (Stephan Nüßlein) という少年より聞書したものである。

(8) Heldischer Zeuge Christi,
uns, die in vielfältiger Angst,
rette durch deine Bitten!
Aller Nöte bist du ledig und hast verjagt
die Seelenverderbende gewaltige Angst.
Gnade und Erbarmen erflehe uns
und rette uns durch dein Gebet,
damit wir deinen treuen Kampf
mit Freuden ehren-heiliger Georg!

(9) Grüß Gott, du schöner Maien,
da bist du wiedrum hier.
Tust jung und alterfreuen
mit deiner Blumen Zier!
Die lieben Vöglein alle,
sie singen also hell,
Frau Nachtigall mit Schalle
hat die fürnehmste Stell.

Die kalten Wind verstummen,
der Himmel ist gar blau,
die lieben Bienlein summen
daher auf grüner Au.
O holde Lust im Maien,
da alles ne erblüht,

du kannst mir sehr erfreuen
mein Herz und mein Gemüt. Ernst
Klusen; Deutsche Lieder.

(10) Käferlein, flieg, flieg,
Dein Vater ist im Krieg,
Mutter ist in Pommerland.
Käferlein flieg!

Flieg, Käfer, flieg,
Dein Vater ist im Krieg,
Dein Mutter ist in'n Stefel gekroche,
Hat das linke Bein gebroche.

(11) Wir wollen den Zaun binden,
Wir binden einen Zaun!
Unsere hübsch und fein
Soll in den Zaun gebunden sein.

(12) Komm, lieber Mai und mache die Bäume wieder Grün,
Und laß'uns andem Bache die kleinen Veilchen blühn!
Wie möchten wir so Gerne ein Veilchen wieder sehn,
Ach, lieber Mai, wie gerne einmal spazieren gehn. Hv. Walter
Hansen; Das große Hausbuch der Volkslieder.

(13) Der Mai ist gekommen,
die Bäume schlagen aus,
da bleibe, wer Lust hat,

mit Sorgen zu Hause.
wie die wolken dort wandern
am himmelischen Zelt,
So steht auch mir der Sinn
in die weite, weite welt. (a. a. O.)

(14) Alles neu macht der Mai,
macht die Seele frisch und frei.
Laßt das Haus, kommt hinaus!
Windet einen Strauß!
Rings erglänzet Sonnenschein,
duftend prangen Flur und Hain:
Vögelsang, Hörnerklang tönt den Wald
entlang, (a. a. O.)

(15) Heiliger Geist, mit Liebesstrahlen
strahlst du meine Seele an,
daß sie gar nicht mehr in Kälte
und in Dunkel bleiben kann.
Heiliger Geist, mit Gottesstimme,
rufst du meine Seele wach.
Ja, ich höre und ich gehe
immer deiner Stimme nach.
(Freudenlied; Elisabeth von Schmidt-Pauli)

(16) Stürze, siebenflammiger Gott,
wieder ins Angesicht der Erde,

daß auf müden Dochten in uns.
neues Glauben und Glühen werde
(Siebenflammiger Gott; Margarete Seemann)

67 Atme in mir, du Heiliger Geist,
daß ich Heiliges denke!
Treibe mich, du Heiliger Geist,
daß ich Heiliges tue!
Locke mich, du Heiliger Geist,
daß ich Heiliges liebe!
Stärke mich, du Heiliger Geist,
daß ich Heiliges hüte!
Hüte mich, du Heiliger Geist,
daß ich es nimmer verliere!
(Gebet des Heiligen Augustinus)

68 Wieder ist das Fest der Pfingsten,
Wieder naht der Liebe Geist,
der dem Ärmsten, dem Geringsten,
Allen tröstend sich erweist.

Blumen blühen allerorten.
und den holden Blumen gleich
kündet mit der Liebe Worten
er das neue Himmelreich.

Laßt uns Mai'n und Kränze Pflücken
nach der Väter schönem Brauch!
Laßt uns Haus und Türen schmücken,
aber unsre Herzen auch!

Denn der Geist der Liebe kehret
nur in reine Herzen ein,
da nur weilet er und lehret
Gottes Kinder hier zu sein (Pfinrich Hoffmann von Fallersleben).

(19) In der heiligen Pfingstnacht abend schlafts nicht!
So reisen wir daher, so reisen wir daher.
Wir roasn über a greane Wies, begegnet uns Herr Jesu Christ.
Wir roasn über a greane Aus, begeg net uns die Liabe Frau.
Da Steckn zoagt auf enka Haus: Buam singts a weng und rast enk aus
Da Baua is a guata Mo.....

(20) Waldvater Englmar, Schützer unserer Auen,
Bitt du an Gottes Thron, bis wir dich einst schauen,
Schirm uns in aller Not,
Führ uns zum seligen Tod,
O sel'ger Englmar.

(21) Wo hoch im Grünen Bayernwalde
St. Englmars Kapelle steht,
Zu der beim lauten Liederschalle.
So mancher fromme Pilger Geht,

Da ziehn auch wir, St. Englmar mild,
Zu deinem heil'gen Gnadenbild.
St. Englmar mild, St Englmar mild,
Du Stern im dunklen Waldgefild!

Maria Brunn der Gnaden,
Du unsre Gnädige Frau,
Wir freundlich dich einladen,
Auf uns vom Himmel Schau,
Heilige Maria, heilige Maria, Jungfrau rein,
Groß und klein, schreien zu dir insgemein. (Wahrfalntlieder NR 108)

Sankt Johann, Sankt Johann
Zünd das Sonnwendfeur an!
All die Geister, die schliefen,
kommen aus Höhen und Tiefen:
Aus den Bergen Kobolde,
aus den Gründen Unholde.
Nixen aus dem grünen See,
Riesen aus dem ew'gen Schnee,
Ahnengeister aus dem Schloß,
Hexen auf dem fahlen Roß.
Sankt Johann, Sankt Johann,
Zünd das Sonnwendfeuer an!
(St. Jahann; Johannes Theissing)

Die Alleseelenkerzen brennen leise,

viel wunde Menschenherzen brennen mit,
und machen immer neu die bange Reise
vom hellen Glück zum Diden, Schritt für Schritt.....

Wo blieben wir, Ging nicht durch Nacht und Grauen
der Eine mit uns Hand in Hand,

Sein Heilandswort will Goldne Brücken bauen.
in jenes lichtumglänzte Vaterland:
Ich bin die Aufstehung und das Leben,
ich will euch alles, alles wiedergeben! (B. M. Moebis)

参考文献

Alpenlänaisches Brauchtum im Jahreslauf.; Otto Swoboda. Das Große Hausbilder der Volkslieder; W. Hansen. Bayerische Volkskunde; Joseph Mündigil. Bayerisches Hausbuch. Badisches Hausbuch. Sitte und Brauch; Paul Sartori. Fest und Brauchtums-Kalender; Gustar Gugitz. Volksbrauch im Jahreslauf; Hedi Lehmann. Frankische Volksliedr. W. Freiherrn und Hauptmann. Bauernbrauch im Jahreslauf; Brauchtum im Schwarzwald; Albert Reinhardt. Das Große Liederbuch; Anne Diekmann. Deutsche Lieder; Ernst Klusen.